

異世界転生したら、三国志だから、アレツと思って、美少女だけ、性転換しちゃって、もうゴーリインさ

にやあたいぶ@飼い猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

蒲公英 「大丈夫ですか葵さん？ｗｗｗｗｗ」

向日葵 「いやあのね、性転換してたのね。そして、それ知らないでセカンド人生だと思ってそれなりに三国志してたら、美少女だから、アレツと思って、ふたなりだつて、レズ入つちやつて、もうゴーリインさ」

蒲公英 「そのまま肉体の安全第一（処女膜）に激突」

向日葵 「もうそれ事件じゃなくて事案なんだよなあ」

目
次

第五話	第四話	第三話	第二話	第一話	冒頭	脈動編	第八話	第七話	第六話	第五話	第四話	第三話	第二話	第一話	冒頭	雌伏編
90	84	75	67	61	57	51	44	37	31	23	17	11	5	1	1	冒頭

雌伏編

冒頭

前述する、私は転生者だ。

よくある異世界モノの物語で見かけるような状況下に今、私は置かれている。

前世、と呼んでも良いのか分からぬが、前の世界では私は男だった。聖フランチエス力学園に通う極一般的な男子生徒であり、ひょんなことから異世界に飛ばされる。原因と思われるような事に思い当たりはない。本当に、気付けば、異世界に放り込まれていた。見渡す限りの荒地に呆然としているしかなかつた私を拾つてくれたのは馬騰という大人の女性であつた。歴史モノのドラマで見るような馬具に身に纏つて、馬に跨る彼女との出逢いで私は此処が自分が知る世界とは違うことを知る。そして彼女の馬の後ろに乗せて貰いながら色々と話を聞いていた内に、この世界が三国志に近い世界観であることを理解する。近い、と表現したのは、先ず、この世界の住民には日本語が通用するのが一つ。そして、この世界は女性優位の社会であり、三国志の史書に名を馳せた名将達が女体化してしまつてゐる為了だ。

私を拾つた馬騰も例に漏れず、彼女の娘と姪の四人娘もまた同じであつた。

馬超、馬休、馬鉄。この三人の内から一人、私は拾い主の馬騰から婚姻することを義務付けられている。いや、そのことは構わないのだ。現代人の感覚で云えば、その内の全員が美少女と呼べる容姿を持つており、胸も大きくて素晴らしい体格をしている。そして、どういう訳か三人が三人共に私のことを好いてくれてゐることもあり、元の世界に戻る事を考えなければ、これ程に素晴らしい話もない。誰か一人なんて選べない、もし許されるのであれば三人共に結婚しても構わないとすら思つていた。

問題があるとすれば、ただ一点、私の性別もまた男性から女性へと

変化してしまつてゐる事にある。

先述する、この世界は中華文化の皮を被つたファンタジーだ。

私に寝床は用意されなかつた。

代わりに馬騰から渡されたのは大きな枕、両面に是と否が書かれている。余りにもあんまりな代物であるが、馬騰の話では早急な関係向上を見込んでのことだそうな。それからといえば、私は大きな枕を両手に抱き締めながら夜な夜な誰かの部屋にお邪魔するようにしている。最初こそドギマギすることもあつたが、人間とは慣れる生き物であるようで、今となつては特に気にしたりとかしていない。湯浴みの度に誰かしらが付いてくるし、背中とか洗つて貰つたりしているし、それに自分が女性になつたせいか、以前のように女性の裸というだけで興奮するような事はなくなつた。だからといって、男性に興奮する訳でもないけど。とにかく、私のことを好いてくれる三人の内、誰か一人を選ぶ決断を出せない私は毎夜、順番に三人の部屋を巡つてゐる。偶に二人に挟まれることもある、気分的にはパジャマパーティー。眠たくなるまで、しようもない話で盛り上がり、瞼が重くなれば夢の中、気付いた時には朝になつてゐる。

目の前にある顔に、おはよう、と告げてから体を起こして朝餉の準備を始める。

馬家における炊事と洗濯、それに掃除といった家事全般は私の担当だ。この時代はまだ調味料の種類は少ないと記憶していたが、味噌や醤油の製法は既に確立されている。なんでも光武帝の偉業の一つらしい。ちなみに光武帝には、租税を収穫の一割になつていたところを半分以下に減らした逸話が残つてゐるが、それは農業改革を起こすことで生産率を三倍に上げた事が元になつてゐるようだ。中でも代表的なのは効率的な稻作の普及である。流石は中国史きつてのリアルチート、まるで転生者のようなだ。塩と砂糖の生産効率化を図つてゐる割に、胡椒を後回しにする辺りがなんとも米キチ転生者っぽい。あまり言及し過ぎると首筋が涼しい事になりそうだ。ともあれ、この時代にしては豊富な調味料を活用できることもあり、私の手料理はかねがね好評であつた。馬騰と三姉妹が戦働きに精を出す中、私は家を守つ

ていることが多い。男としては情けないかも知れないが、これが適材適所だ。というよりも馬超を筆頭に、馬家の武芸には足元にも及ばない。下手について行けば足手まといになる。それが分かつていてから私は私の出来る範囲で拾つてくれた馬家に恩を返していきたいと思つた。

私は馬家の皆を好いている、それこそ本当の家族のように想つている。

私の名は向日葵。むかいあおい今は馬騰の提案により、馬雲緑と名乗る者だ。さて、ここまで話で違和感に気付いた者も多いかと思われる。

当たり前の事実だが、同性では子供はできない。そうであるにも関わらず、彼女達の親である馬騰は結婚しろと言つたのだ。子を残す為に。繰り返す、この世界は中華文化の皮を被つたファンタジーだ。この世界には男性器を生やす薬も流通されている。そして後漢末期の不安定な情勢、馬三姉妹は全員が戦上手で涼州軍の要であつた。それで子を孕むことで席を空けることは許されない。では、どうするのか。後継ぎは別の誰かに孕ませれば良い、という簡単な話だ。実際、馬騰も他の女を孕ませることで三人もの子宝に恵まれている。そして、大事なのは三姉妹は三人共にそういった事情を理解しており、私の事をそういう対象として見ていくという事だ。

これは、つい先日の話になる。

首筋に擦つたさを感じて、ふと真夜中に目覚めてしまった。生温かい吐息に身動きすると背後から悲鳴が上がつたのだ。まだ眠たい事もあって、そのまま振り返らずに寝付こうとすると背後から荒い吐息が聞こえ始めた。そして微妙に粘着質な水音が聞こえる。くぐもつた嬌声、水音は止まらず、背中越しに感じる身動きに気付かないふりをしながら事が終わるのを待ち続ける。それは深夜遅くまで続いた。そういう事事が起きてから私の寝付きが悪い。

私は女体は好きだ、美少女も好きだ。馬姉妹の容姿は勿論、内面も好みしく思つていて。誰か一人とは言わずに全員を結婚したいと思える程度には好きだ。しかし、それは私が男としての話である。この世界は中華文化の皮を被つたファンタジーだ、この世界には男性器を

生やす薬も流通されている。挿れるのは相手であり、受け入れるのは私だつた。性的な目で見られるることは少し恐ろしい、男性器を挿入される事は想像するだけで悍ましい。かといつて拒絶する事もできない。それこそが私が馬家に拾われた理由であり、求められている事である為だ。

覚悟は定まらず、真夜中、背中越しに感じる情欲に怯える日々を過ごしている。

第一話.

数百年と続いてきた漢王朝、

女性主流の時代において、今も昔も御家を持つ名家豪族を悩ませ続けてきたのが子作りの問題であった。

通常、人間は異性に恋愛感情を持つように作られている。不思議な蜂蜜なるものが発見されて、女性同士の交配が可能になつた今でもそれは変わらない。また女性同士で交配した場合、確率的に子は女になる事が多かつた。現に今、私が孕ませた三人娘の超、休、鉄も全員女性だ。この事が名家豪族、特に皇族の間では問題視されており、分家からの取り入れ、もしくは養子縁組を活性化させることで、できるだけ男児を多く産ませようという試みが各地で起きている。とはいっても由緒ある家柄の御家では身元も分からぬ者を血族に加える訳にも行かず、かといって名家豪族に男が減りつつある今の御時世、男を娶ることも難しい。また当主としての責務を果たす為に子を孕む時期も考えなくてはならないとあっては、時間に余裕が持てず、止むなく妻を娶つて子を孕ませる事になる御家は多かつた。もし仮に天の御使いなる者が現れたとして、その者が男性であつた場合、それはもう引く手数多の人気物件になるに違いない。今の大陸には由緒正しい血筋、少なくとも周りを納得させられるだけの背景を持った男性が求められているのだ。そして、なによりも同性相手の交配というのは、異性愛者からすれば意外ときついものがあつたりする。先ず陰茎を勃たせることで一苦労だ。勃起させる為に性癖の開発から試みなくてはならない事もあり、娶つた妻と共同作業であれやこれやと様々な行為を試す羽目になる。

それが私、馬騰。翡翠であった。

男を孕ませる為に三度も子を産ませたが、結局、女性ばかりになってしまった。元は互いに異性愛者、今は離れて暮らす妻には申し訳ないことをしたと思っている。娘達には自分と同じ過ちを犯して欲しくはない。されども御家の後継を用意することは必要だ。今が平和な世の中であれば、同性だの、異性だの、そういう情事に口を挟む気

はないのだが、うちの娘は全員が武芸の腕が立ち、涼州軍の中核を担つてているのが問題だつた。今の不安定な時期に、妊娠で戦線を離脱されるのは凄く困る。いや、回すだけなら一人が抜けたところで問題はない。しかし、それでは緊急時の対応ができなくなる。董卓 賈駿月と詠が居ない今、涼州戦線は割とギリギリなところで保たれていた。今の状況が何時まで続くかも分からぬ。後になつて無理をして子を作るくらいなら、と今の内に女を与える事を考えていた。そんな時に拾つたのが葵あおいという小娘だ。幸いと云うべきか、我が家は定期的に異民族の血が混じるような家柄であり、由緒正しい名家や豪族のように家柄や血筋に拘りはない。そして、なによりも葵は「男は絶対に無理です」というような奴だ。少なくとも私の時と同じ不幸を味あわせることはないと考えた。

三人の内一人、誰か一人でも夫婦として仲睦まじい生活を送つてくれれば良い。私個人としては後継ぎが一人、産まれてくれるだけでも良いのだ。できることならば男児を一人、欲を言えば一人でも多くの子を残して欲しいとは思つているが、それはそれ、後世に御家が残るのであれば、それ以上の贅沢を云うつもりはなかつた。誰か一人くらいは本気になつてくれたら良い、そんな軽い気持ちだつた。

ただ誤算だつたのは、私の娘達は皆、思つていた以上に真面目だった事だ。

「……で、どうして私のところに来る事になる？」

真夜中。私、馬騰の私室にて、扉の前に立つのは何時ぞや拾つた小娘であつた。是と否と大きく書かれた枕を両手に抱えた姿で、ぶるぶると震えながら涙目で突つ立つてゐる。理由を問えば、「怖い」と単純な答えが返つてきた。どうやら私が思つていた以上に進展が早かつたようだ。最初の段階で説明を済ませてあるし、いづれ婚姻し、子を孕ませる相手だと意識はさせていた。その上で夜な夜な娘達の部屋に送り込んでいるのだ。彼女に持たせた枕も性的対象として意識付けさせる為の小道具だ。ちなみに是は快適な睡眠を、否は眠り難い形に仕立ててあつたりする。さておき、今は目の前の小娘をどうにかすべきか。小動物のように身を震わせた挙句、何処かに隠れるような事

もせずに私のところに来る辺り、なかなかに追い詰められているのか
も知れない。少なくとも三人共に彼女、葵を性的対象として見ている
ことは確かなようだ。

「……私も女相手に孕ませた経験を持つていてるのだが？」

それはもう性癖を開発する為にあれやこれやと口に出せない事を
多く取り組んでいた程だ。葵はびくりと身を震わせると「わ、私はこ
ちらで寝ますから」と来客用の長椅子に向かっていった。「私は怖く
ないのか?」と問えば「翠達とは目が違うし……奥様も居ましたよね
?」と返された。まあ確かに私は妻以外と性行為に及ぶつもりもない
し、そもそも最後まで女性を性的対象として見ることはなかつた。必
要だからした、男児が求められていたことも事実。それだけの為に体
を重ねてきた。ただ睡眠場所に長椅子を選ぶ辺り、信用は得られてい
ないのだろうけど。

「まあ、今日は良い。でも明日からは鍵を閉めたままにするからな」
言つて布団を被り、目を閉じる。

†

彼女、向日葵は孤児であつた。

涼州の英傑と持て囃された月が、この地を離れてから異民族が活性
化している。その為、国境では異民族による襲撃と略奪が定期的に行
われており、涼州軍の中核を務める馬家は度々戦場へと駆り出されて
いた。追い払うだけなら問題はない。ただ戦後処理やら、事後の対策
というのは詠が居なければ捗らなかつた。他にも月が趣味の一環で
続けていた屯田も彼女なしには成果を上げられず、遠征先の補給に苦
労するにもなつてゐたりする。

かつて三人で涼州を支えていた時、面倒だからと戦以外の全てを月
と詠に押し付けていたものだが、こうして二人が居なくなつて初めて
後方支援の大切さを理解した。だから私達の仕事が円滑に進むよう
にと後方で輸送を担当する者達には酒場の席で労いの言葉を入れた
り、敵将の頸を取つた者は勿論、そのお膳立てをした者達にも等しく
功績を与えるようにしてゐる。気苦労ばかりが増えた気がする。詠
だけでも戻つて来ないかな、と思う毎日だ。

さておき、いつもの様に戦を終えて、被害確認の為に村を回つていた時のことだ。

彼女はただ一人で荒地を徘徊していた。

これだけであれば、珍しいことでもない。戦災から逃れる為に民草が村を飛び出すことは珍しい話ではなかつた。

しかし、彼女はそういった者達とは違つていた。村から逃げ出したにしては身形が小綺麗であつたし、戦から逃れてきたにしては緊張感のない顔をしていた。きよろきよろと私のことを見たり、連れてきた配下を見たりして、なんというか現実感のない様子だつた。それはまるで危険を知らない幼子のような有様であり、たぶん放つておくと簡単に死ぬのだろうな。とも思う。少なくとも賊徒や異民族の慰み者になるのは確実で、仮に街まで辿り着けたとしても商人相手にコロツと騙されて、娼館辺りで働いてそうな人物だ。無警戒に、トコトコと歩み寄ってきた彼女を見て、不安に思う。武装した私を相手に危機感ひとつ抱かないのは、抜けている。を通り越して無神経と云うべきだらう。

「あの、此処は一体、何処なのでしょうか？」

今の御時世、官軍であつても決して信用できる相手ではないだらうに。

「此処は臨羌県になるぞ」と呆れ混じりに答えると「りんきょう県?」と聞き慣れない言葉を繰り返すように咳いた。そんな県なんて聞いたこともないな、とか考え込んでいたので「金城郡の最西にある臨羌県だ」と付け加えた。すると余計に首を傾げてしまつた。民草の中にも教養を持たない者は多い、というよりも足し引き算盤ができる民草がどれだけいるのかつていう話だ。

だからもつと分かりやすい言葉で口にする

「此処は涼州だ。これぐらいは聞いたことがあるだらう?」

「りょう……しゅう? 涼州? いや、待て……中国では、もう読み方も変わつていいはずでは! そもそも言語が伝わつてているのもおかしくならない! えつ、ちよつと、いやいや、えつ、それつて本物?」

ようやく状況が掴めたのか、私が持つ抜き身の槍を見て顔を蒼褪め

させる。

それはそれで話がおかしいような気がする。正しい判断力を持つていればこそ、今のような反応を見せる。しかし先程までは判断力が欠如した人間だと私は思っていた。そして私と配下の将兵を見て、軍勢以外の何と勘違いすると云うのか。まるで花よ花よと育てられてきた箱入り娘のような人物だが、それはそれで彼女の立ち振る舞いが名家や豪族のソレに見えないと云う問題が出てくる。

今、分かるのは、私が見放したら不幸になるんだろうな。と云うことだけだった。

「行く宛がないのであれば付いてくるか？」

手を差し伸べると小娘は、特に警戒もなしに私の手を受け取った。

小娘は、余りにも無知が過ぎた。

異民族も持つている真名の文化を知らない程であり、初めて名乗つた名が真名であつたことには驚いた。身形から良い生まれだとは思っていた。不自然に抜け落ちた常識から箱入り娘だという説も考えた。しかし、彼女は用の足し方も分からぬということを打ち明かされた時には、流石に私も頭を抱えてしまつた。何処で用を足せば良いのか、とかではなく、女性はどうやって用を足しているのか分からぬい、である。記憶喪失という線も考えたが、その割には彼女は自分ことをよく分かつていた。少なくとも自分が何者か、という点で混乱するようなことは一度もない。

まあ彼女の話は俄かに信じられないことが多いのは事実だ。元は天の国とも呼べる場所で男として暮らしていたが、ひよんなことから気付けば、この地に女として立つていたとのだと彼女は云うのだ。仮に彼女が天の使いだつたとして、どうせなら男のままでも良かったのに、と思うこともあつたがそれはそれ、根っからの女好きの女というのは意外と希少だつたりする。民草の間では異性同士の恋愛が常であるし、名家豪族では同性を愛せるように幼い頃から特別な教養を授ける者も多い。特に子を他家へと嫁がせる予定の場合は、その傾向が強かつた。そして、それだけしても、やはり異性の方が好みとなる者も多い。

そういう意味で言えば、葵は稀有な才能を持っていたと云える。自分は元男と言うだけあり、男性の裸体を見ても何も感じない癖に、私の裸を見ると顔を真っ赤にして慌てふためいたりする。というよりも自分の裸でも顔を赤くするし、今でも慣れきってはいない。反応だけ見ると元男という話は、ひとまず理解できるものではあった。

屋敷で妹達と一緒に暮らさせてみると、元男という話が嘘のように家事全般を熟している。それも丁寧に事細かく、それに彼女が作る料理は美味しかった。娘達の面倒もよく見てくれており、唯一、家の手伝いをしてくれた鶴は感涙を流していた。ごめんね、ずっと政務と軍務で家のことを放つたらかしにしてごめんね。

ほどなくして小娘を馬家の養子として受け入れて、馬雲緑の名を与えることになった。

それと同時に是否枕を授ける。

ムツツリな癖に、こういう事には疎いのか。ぽかんとした顔を浮かべる葵に私は告げる。

「うちの娘の内、誰でも良いから抱かれて来い」

急に言われても現実味が薄かったのか。はあ、と気のない返事を零すだけだった。

†

そして今、長椅子で眠る葵を思いながら少しだけ思案する。

大方、自分が子を孕む事に現実味が帶びて、臆したと言つたところか。何か手を打つ必要はあるだろう、この状態で事に及んでは行為そのものに恐怖心が植え付けられるかもしれない。それに無理強いは互いを不幸にするだけだ。とりあえず今は逃げ道が必要か、私が頭ごなしに娘達を抑えつけては、それはそれで暴発する可能性もある。……そういえば丁度良い奴が居たな。そう思い至った私は明日、筆を取ることを決める。

第二話.

「彼女の真名は葵あおい、名前はまだ決めていない」

とある日の事だ。御母様が戦帰りに少女を持ち込んできた。

特に詳しい説明はされず、今日から一緒の屋敷で過ごすことだけを告げて部屋を出て行つた。葵と呼ばれた少女がひとり取り残される。最初、見た時は戦帰りに拾つてきたとは思えないほどに綺麗な身形をしていると思った。そして同性の私が少し嫉妬する程に彼女は美しい容姿を持つており、ぽけっとした顔で私達を見つめる姿は何処となく抜けていて、そこがまた可愛らしく映つた。お互にどうすれば良いのかわからなかつたのだろう、暫しお互いのことを見つめ合つていふと「あ、えつと、その、つまり、そういうことです！」よろしくお願ひします！」と少し上擦つた声で頭を下げてきた。

こういう子が男に好かれるんだろうな。そんなことを思つたりする。

葵はひ弱だ、軟弱と云つても良い。まるで憧れを見つけたような輝かしい目で私の槍を見つめてきたものだったので、試しに槍を持たせてみれば、満足に槍を構えることすらもできず、危なつかしかつたのですぐに槍を返してもらつた。その時、ちょっと涙目になつていたのがあざとかつた。彼女に戦働きはできそうにない。その代わりと云つてはなんだが、彼女はよく家のことを頑張つてくれていた。今までは鶴に任せっきりだつた家事を手伝つており、少し汚れていた屋敷の中は見る見るうちに綺麗になつていつた。健気に甲斐甲斐しく家の手伝いをする葵に、鶴は泣き崩れてしまつた。いつも散らかすばかりで、とか、ちゃんと栄養とかも考えているのに、とか、今日は御馳走つて言つたのに外で買い食つするし、とか、うん、ほんのちよつとだけ思い改めようかなつて思つた。それから葵が来てからは御飯も豪勢になつた。何時もは訓練が終わつた後に鶴がチヤチヤツと作る大皿一品の簡単な料理ばかりであつたが、ほとんど家から出ない葵の料理は手が込んでいて種類も多かつた。それでいて、毎日のように料理を作る鶴や時々だけど家にいる時は料理を作つてくれる御母様よ

りも美味しかったりする。手間がかかつて分だけ美味しいのは分かつてているし、舌が慣れているのは御母様と鶏の味だから週に一度くらいは食べたくなるが、それでも普段は葵の料理が良いな。とか密かに思つていて。鶏はどうだつたのか云うと、他人が作つた料理は食べるのがこんなに美味しかつたなんて、と感動していた。後で労つてあげた方が良いだろうか、適当な言葉だと嫌味にしかならない気がする。かといつて家事を手伝おうとすれば、鶏に怒られるので手出しが出来ない。戦に出向く時、葵は必ず送り出しに出て来る。戦から屋敷に帰つて来ると、いの一番に駆けつけて、ほつと胸を撫で下ろした。そして、とても嬉しそうにはにかむのだ。私が戦で功績を上げた話を聞く時は、酒の席に付き合う友人のように黙つて耳を傾ける。申し訳程度に相槌を打つてくれる。私が屋敷に戻る時に比べると余りにも反応が薄いものだから「戦の話は退屈か?」と問うてみると「そんなことはない」と彼女は首を横に振つた。

〔翠、貴女が功績を上げることはとても喜ばしいことですよ〕

それでも、と彼女は顔色を暗くして告げる。

「出来ることなら戦場に行つて欲しくない。それが例え、お勤めであつたとしても親しい人が命の危険に晒されるのは心臓に悪い」

貴女が帰つてくる事が私にとつて一番の幸せです。と葵は力なく笑つてみせた。

それから突つ込むばかりの戦は控えるようにした。勿論、突撃する時は思い切りが大切だ。しかし出来るだけ入念な準備をして、斥候を出す頻度を倍以上に増やした。精度の高い情報を仕入れることに苦心し、出来るだけ確実に相手を仕留められるように心掛ける。私の実力は母馬騰、御母様を超えていた。馬を駆けるだけで絵になり、馬上で槍を振るう姿に誰もが見惚れる。返り血一つ浴びない姿、その武芸を讃えて、西涼の錦。と決して鎧びぬ涼州の誇りだと呼ばれている。あまり血を浴び過ぎると帰つた時に同居人が心配するから、怪我をすると同居人が青褪めた顔で不安がるから、そんな理由で綺麗に殺すことを心掛けているなんて味方は勿論、敵にも言えない。と苦笑する。

この頃になるともう、葵なしの生活なんて考えられなくなつていった。

世間一般的に言われるような、良き妻、というのは彼女ののような人物が呼ばれるのだろう。彼女もいすれ良い人が出来たら屋敷を出て行つてしまふのだろうか。それは少し嫌だな、となんとなしに思つた。

更に日が過ぎて、大きく是と否が書かれた枕を持った葵を隣に御母様が宣言する。

「この子を貴女達の誰か一人と婚姻して貰うから、そのつもりで」ざつくばらんに言われた言葉に私達は衝撃を隠せず、姉妹三人で互いを見合わせた。

そして瞬時に理解する。こいつら全員、自分と同じことを考えている。いまいち状況を理解できていないのか。あざとく首を傾げる葵を見て、私達姉妹は三人揃つて生睡を飲み込んだ。意識していなかつた訳ではない。名家に生まれた以上、同性で事を運ぶ場合があることは知っていた。実際、私達姉妹は同性婚によつて産まれた子なのだ。意識しないはずがない。もし妻を娶る時が来るのであれば、彼女のようないい人が良いと思つていた。それが明確に婚姻するという道筋を作られて、意識しないはずがない。

葵は眠たそうに欠伸をすると「今日は何処で寝よつか?」と目を擦りながら問いかけてくる。
「あれ、聞いてなかつた? 私、今日から寝る時は貴方達の部屋つて事になつてるから」

拷問だろうか、じとつと母が出て行つた扉の先を睨み付けた。

この後すぐ私達姉妹は御母様に呼び出されることになる。なんでも伝え忘れていた事があるとか。あの時、一緒に教えてくれたらよかつたのに、とか、ぶつくさと呟きながら部屋に入ると御母様はまたしても衝撃的な事を口にする。

「葵と初めて夜を共にする時は必ず抱き締めて口付けすること」

最初だけで良いぞ、と御母様は言うだけ言うと持ち帰つた書類仕事に没頭し始めた。

もう取り合う気もない母の様子に、誰かが言わずとも三人一緒に部屋を出る。そして同時に溜息を零した。全員が全員、顔が真つ赤になってしまっている辺り、やはり意識はてしまっているのだろう。意味が分からぬ、と憤慨してくれれば敵が一人減るのだが、そんなことはなかつた。ただただ黙り込んだまま、悶々とした感情を抱き続ける。本当にどうしたものか。そう悩んでいると一人からジトツとした目を向けられていることに気付いた。

羨ましそうな視線。ああ、そうだ。今日は私の番だつた、と再び溜息を零した。

「翠姉様、変わつてあげよつか？」

「あ、蒼つたら狡い。わ、私も変わつても良いよ？」

「……譲るつもりはないからな」

嫌そうな顔をしていたのに、と二人して抗議をしてくる。

そんな二人を無視して、台所へと足を運んだ。氣負う心、顔を洗つてから入念に歯磨きする。口臭を何度も確認して、高鳴る胸を握り締めながら自分の部屋に入る。葵は部屋で待ち構えていた。何時も、きつちりと衣服を着込んでいる彼女。しかし寝る時は別なのか、ゆつたりとした服装をより着崩していた。胸元が開いており、恥じらうよう視線を逸らす。そして寝台には「是」を表にした枕が置かれていた。これはもう覚悟してきた、と考えても良いのだろうか。距離を詰め、逃げない。髪に触れる、抵抗はない。搔き上げる、身を震わせるだけ。普段、髪に隠される耳元やうなじ、それを見るのは、なんとなく背徳感を覚えた。彼女は綺麗好きだつた。体や髪を洗うのに石鹼をよく使つており、消費量も多いものだから自分で石鹼を作つたりもしている。彼女が使う石鹼は香草を混ぜていることもあり、良い匂いがした。スンと嗅ぐと仄かに甘い、それがまた酷く、情欲を湧き立てる。両手を背中に回した。それでも抵抗がなかつたからギュッと力強く抱きしめた。「え、あれ？」と戸惑いの顔を浮かべる。それがまた可愛く思えた。もつと虐めたいと思つた。だから唇を奪つた。舌は絡めず、軽く押し付けるだけの接吻だ。数秒、柔らかい感触を確かめてから唇を離す。ぽかんと抜けた顔を浮かべる葵、そして、徐々に

顔を真っ赤にさせていって、耳まで赤くしたところでボフンと爆発した。

その日はこれでおしまいだ。おめめをぐるぐるに回す寝台に寝かせて、私は悶々とした感情を胸に潜めながら体を丸める。

疼く想い、今日、初めて私は自慰をした。

†

異世界転生と云えば、無双チートだ。チーレムだ。

そう思い立つた私は馬超、つまり翠に頼んで槍を持たせて貰った。重かった、危ないからと槍を取り上げられた。夢も希望も魔法もなかつた。ステータスもオープンしなかつた。というよりも女性の身になつてから体力が落ちている気がするので、むしろ弱体化している可能性すらもある。今日日、異世界転生と云えば、チートで無双するのが流行りだというのに神様は分かつちやいない。まあ私、神とか女神とか出会つちゃはないのだけど、さておき、現実を見つめ直した私は自分にやれる事をしようと思い改める。そして手を付けたのが家事全般、男子高校生なのだから家事の一つや二つはできて当然、ついでに云えど、私は一人暮らしをしていたので自炊とかはよくしていた。バレンタインデーには友チョコとか渡してたし、ホワイトデーにはクッキーとか焼いていたし、裁縫で破れた衣服の修繕もよくしていた。細かい作業は性に合っていたし、料理を作るのも割と好きだった。これといった趣味がなかつただけとも云う、実際、退屈凌ぎの暇潰しで家事をすることは多かつた。

折角、異世界に来たのだから男らしく暴れてみたかつた気持ちはある。しかし、その気持ちは頭から血を被つた翠の姿を見て、直ぐに諦めた。いや、だつて無理、あれは無理だ。戦場帰り、頭から血を被つた翠を見て、本人は大丈夫だつて言つてるのに、私は彼女が本当に怪我をしていないのか心配で服を脱がせようとした。とんだセクハラである。翠達が戦場に出た時はあまり心配していなかつた。だつて馬超ですし、西涼の錦ですし、五虎将軍ですし。でも実際に血塗れになつて帰つてきた姿を見て、その考えは間違つていたことに気付いた。翠は得意顔で武功を誇るけども、そんのはどうだつて良い。私

はただ翠が無事に帰つてくれたことが嬉しかった、無事に帰つてくる。それこそが最大の武功だと私は思う。だから翠の血に濡れた手を両手を握り、その温もりを感じ取る。嗚呼、生きている。死んでも不思議じやない、戦のない現代社会でも人間なんて簡単に死んでしまうのだ。戦なら尚更の話、生きていて良かった。目頭が熱くなる、涙が溢れた。狼狽える彼女に私は告げる。

次も無事に帰つてきてください、と。血を見ただけで体が震える私では戦働きなんて、とてもできそうもない。できないものは仕方ない。

翠、蒼、鶴。三人が戦に出て行く時、私は両手をギュッと握り締める。そうしないと不安だったからだ。ともすれば、簡単に消えてしまいそうな彼女達の存在を確認するように、無事に帰つてきますように、と念を込めてギュッと握る。彼女達は戦に出向く、弱い私は戦に出る事は出来ない。だから家を守る、彼女達が帰つてくる場所を守ろうと心掛けた。そして戦場から戻つてきた彼女達を満面の笑顔で、おかげり、つて迎え入れるのだ。

今日もまた家事をして、時間の合間に刺繡をする。

屋敷から出ない私が彼女達にできることなんて高がしれている。精々、神頼みくらいなものだ。だから、御守りを作つている。彼女達の息災を祈つて、丹念に編み込んだ。

……最近、ふと不安になることがある。

ヒロインムードをし過ぎてはいいかと、いや、そんなことはない。何故なら私は歴とした元男だからだ。

そうだ、私は前世でも男らしく生きようと努力をしていた。だからきっと私は男らしいのだ。

ふんす、と胸元で両手を握り締めて、何時ものように鍛錬に出向いた皆の帰りを待つ。

今日は肉じゃがだ！

第三話.

「あ、えっと、その、つまり、そういうことです！ よろしくお願ひします！」

辺々らしい様子で頭を下げる少女、葵は御母様が新しく家に連れてきた同居人だ。

詳しい事は告げられず、母は少女一人を置いて部屋を出る。知りたい事があるのなら本人に聞けという投げやりっぷりだ。ただまあ部屋に残された少女は素直で大人しそうだつた事に内心で安堵する。いやだつて今居る姉妹だけでも手に余る有様だし、これ以上、問題児が増えてしまつたら私の身が保たない。

ただ如何にも女性らしい容姿と仕草を持つ彼女には少なからず思うところがある。

葵が隣に居ると自分の女性としての自信が損なわれてしまうのだ。家事全般をソツなく熟す。時折、失敗する事もあるけども持ち前の愛嬌と明るさで皆を笑顔に変えてしまうのだ。なんというか、彼女は無知で、無邪氣で正直だつた。偽りのない心からの行動は見るものを搖さぶる。自分の感情を小さな体を使って、目一杯に表現し、しかし周りを不快にさせないように取り繕つたり、誰かが気落ちしている時は理由も聞かずに寄り添つた。自分の事だつて、周りの事だつて、構わずに自分ができる最大限を發揮しようとすると彼女は何時も輝いて見えた。

きっと彼女のような人間が、世の中で云う魅力的な女性なんだろう。と私、鶴は思つた。

彼女に抱いた嫉妬心、疼く想いは何を意味するのか。

初めて彼女を女として見たのは、私が姉妹の愚痴を零していた時だ。いつも散らかすばかりで、とか、ちゃんと栄養とかも考えているのに、とか、今日は御馳走つて言つたのに外で買い食いするし、とか、そんな事をよく口にしていたような気がする。そんな面白くもない話を相槌を打ちながら黙つて聞いてくれる葵に甘えてしまつて、つい長話ををしてしまつた私に嫌な顔ひとつ見せずに葵は優しく微笑んだ。

そして私の頭にポンと手を乗せる。爪先立ちで目一杯に体を伸ばしながら「ひとりで頑張つて来たんだねえ」と柔らかく撫でられる。実の親にすら一度もされた事がない行為、軍隊を率いる立場になると書類仕事なんて出来ても誰も褒めてくれないし、家のことだつて誰も理解してくれない。戦働きだつて姉さんには敵わない。家事に書類、御家の帳簿とやる事が多いから鍛錬に費やす時間も取れない。姉さんから一度、「最近、鍛錬をサボつてないか?」と呆れるように言われた時は姉妹なのにガチめの殺意が湧いた。とはいえ今は割り切つていいから前よりも辛くはない。姉さんの武芸には神が宿つている。天賦の才とは姉の為にあるような言葉であり、私がどれだけ努力しても辿り着けないとは理解している。なにより姉さんは西涼の錦だ、姉さんが戦場に立つ意味は私なんかとは比べものにならない。だから姉さんを万全な状態で戦場に送り出せるように、余計な事に気を煩わせることがないように、私は自分が日陰者である事を認めたのだ。誰にも褒められず、これが当たり前なんだと言い聞かせて、だけど、私だって姉さんに負けないくらいには頑張ってきたつもりだ。

抑え込んでいた気持ちが溢れ出す。「あれ、おかしいな?」と拭つても止まらない涙に私自身が一番動搖していた。

嫉妬心に僅かな劣情が混ざつていたことに気付いたのは何時頃か。日が過ぎて、葵が馬家に馴染んできた頃合の話だ。同居人に過ぎなかつた彼女は家族になつた。今はまだ義理の妹と云う話、しかし御母様は私達のいづれかと婚姻させると言つた。その瞬間、私はチラリと横を盗み見る。姉妹二人と目が合つた、そして皆が私と同じように葵の事を单なる妹として見ていないことに気付いた。嫌だな、つて思つた。二人には渡したくない。でも、私は二人よりも魅力的で居られる自信はなかつた。いや、でも、同性を愛すると云うのは、やはり違つてゐる。名家豪族の間に根付いた女尊男卑の社会において、男性の地位は極端に低くなつてゐるが、それでも男の子は女の子を、女の子は男の子を愛するのが自然だと云う考えが増え始めていた。女性同士で子を作ると女性が生まれる事が多く、そのことを問題視する声が大きくなつてゐる為だ。それに女性が女性を愛するには、本来、特別な

訓練や教養が必要だとも知らされている。だから私が抱いた感情が、普通ではないことを私は理解していた。

それでも嫌だと云う想いは拭い取れなかつた。

これから先、葵は私達三姉妹の中から一人と夜を過ごすことになる。

話し合いの結果、葵からの要望がない限り、三日に一度、ジャンケンで決めた順番で葵と一緒に夜を過ごす事に決める。そして初めて、葵と添い寝することになったのは姉さんだつた。真夜中、胸が疼く、布団に丸まりながら悶々とした想いを抑え込んだ。今、姉さんと葵が同じ寝台の上で眠つてゐる。その事を意識するだけで胸が締めつけられるほどに苦しくて、爛れ落ちそうな程に心が痛かつた。もしかすると初日から肌を重ねていたりとかするのだろうか、嫌だな、それは凄く嫌だ。初日から肌を許してゐる葵を想像することも嫌だつたし、それが理想を押し付けているようで自分の事も嫌になつた。もし仮に肌を許していいたとして、自分にも許してくれるのだろうか。とか考えてしまうのも最低だつた。何よりも最低なのは、嫌なのに、疼く想いを止められず、姉さんに抱かれる葵を想つて、自慰をしている自分だつた。最低だ、絶対に幻滅される。粘着質な音を立てながら幾ら続けても眠れなくて、半ば自棄になりながら、自らの秘部をずっと弄り続けた。外が明るくなり始めた頃合、嗚呼、本当に最低だ。と真つ赤に腫らした目を閉じる。もう何も考えたくない。

その日、私は初めてズル休みというものをした。大して体調も悪くないのに調練を休んだ私は、その日、気不味さから憂鬱に過ごしていだ。ずっと私室から出ることが出来ず、時折、葵が様子を見に来てくれる時だけ部屋を開ける。大丈夫? とか、熱はない? とか、コツンと額同士をくつ付けられた時は別の意味で顔が熱くなつてしまつた。今日の食事も私の担当だつたのに葵に全て任せてしまつた。それでも葵は一言も嫌味を言わず、今日は御馳走だよ。と満面の笑顔で伝えてくれた。

夕食は赤飯だつた。何のお祝い事だつたのか分からずに聞くと「大人になつた記念だよ」とドヤ顔を胸を張つてみせる。その後ろで顔を

赤くする姉さんを見て、胸の奥底に溜まる想いがぐじゅぐじゅと醜い色へと変貌していくのが分かつた。「今日は鶲だつて聞いてたけど体調が悪いなら……」続く言葉を聞きたくなくて「大丈夫」と咄嗟に葵の手を握つた。本当は大丈夫なはずなんてなかつたけども、明日以降に回されると、それこそ可笑しなりそうだつた。気遣う葵を無理やりに説き伏せて、葵と夜を共にすることになる。

夜遅く、部屋に訪れた葵は肌着姿だつた。そして、その肌着と云うのが、襯衣シャツのこと。に妙な文字が書かれているのだ。受入準備万端、とドヤ顔で着熟している。何を受け入れるのだろうか、ナニを受け入れてくれるのだろうか。葵は是否枕を片手に抱えたまま、寝台に座る私の隣に腰を降ろすと強気な顔付きで口を開いた。「なにか悩んでいるのなら、この私が話を聞いてあげるよ」と胸を叩いた。ああ、そういう意味ね。ホツとしたような、ちよつと残念なような、自分の卑しさに嫌気が差すような、キラキラと目を輝かせながら包容力を發揮しようとする葵の姿に、なんだか悩んでいるのが少し馬鹿らしくなつて、ほんのちよつとだけ気楽になつた。この警戒心のなさ、葵の心はまだ誰にも揺れていらない。

それを確信して、私は今はまだ妹の彼女に問い合わせる。

「翠姉さんは何処までしたんです？」

「んー？　何処までつて？」

「赤飯、炊いてましたよね？」

ああ、と葵はポンと手を叩いて答える。

「抱きしめられて口付けを交わしました。だからもう誰にも子供っぽいとか言わせません」

ふふん、と鼻を鳴らす葵に安堵し、そして、その唇が他の誰かに汚された事に嫉妬する。

初めては私が良かつた、と。何時ものままの奥手な姉さんで良かつたのに、と。私にも初めてが欲しい。

もつと大人にしてあげます。と決意を込めて、彼女の小さな体をギュッと抱き寄せる。

「……えつと、その？　鶲も？」

「私は嫌ですか？」

「い、嫌じゃない。嫌じゃないけど、なんか、皆、おかしくなつてない？」

？」

おかしくしたのは貴女です、と唇を重ねた。

柔らかい感触。本当なら汚いと感じる唾液が、今は甘美だった。抱き締めて唇を重ねる、それだけの行為が気持ち良かつた。ピクンピクンと震える葵の体が可愛らしい、愛おしい。もつと感じたいな、そう思つて、唇を軽く吸つてみた。すると葵が悲鳴を上げた。大きく体を跳ねさせて、反射的に私の体から逃れようとする。もう腕の中から逃したくなくて、強く抱き締める。葵の匂いする、少し甘い匂いだ。唇を重ねる、吸い付ける。すると葵は体を跳ねさせて、身動きする。余りにも暴れるものだから寝台に押し倒した。そのまま体重を掛けるように唇を重ねる。チュツという可愛らしい音がなる。葵の顔は真っ赤で涙をポロポロと流していた。やだ、と。やめて、と。怖い、と。泣きながら懇願する。そんな彼女が愛くるしくて仕方なかつた。唇を重ねる、チュツと短い音が何度も鳴らされる。バタバタと足を暴れさせる葵をしつかりと抑えつけながら葵の頬を舌で舐める、葵の味がした。そして頬に唇を落とす、葵の感触がした。首筋に唇を這わせる、チュツと吸うと薄つすらと赤い跡ができた。今度はもつと強く吸うと、くつきりと吸い跡が残された。あつ、あつ、と声にもならない声を上げる葵を見下して、嗚呼、これはいいな。と、もつと吸い跡を付けた。首筋から胸元に、そしてまた唇を奪つた。とろんと蕩け始めた葵の目が、急に見開かれた。「もうやめて！」と「本当に不味いから！」と暴れる葵を、もつと虐めたいの一心で抑え付けた。もつと激しく唇を吸つて、その奥にある舌を吸い上げた。

ビクンと葵の体が大きく跳ねる。そして全身から力が抜け落ちるよう抵抗がなくなつた。

「あー……だから、嫌だつたのに……やめてつて言つたのに……」

うわ言のように零される言葉、そして下半身、葵を抑え付ける為に股間部に立てた膝に温かく濡れる感触があつた。

「もうやだー……」

声もなく泣き始める葵に、私は狼狽えるしかない。

とりあえず服を脱がせて、着替えさせて、布団も別のものに取り替えて、必死になつて機嫌を取る為に頑張った。しかし、その甲斐なく私は床で寝た。

朝になつても機嫌は直らず、目も合わせてくれなかつた。

†

ふと街中を歩いていると面白いシャツを売つている店を見つけた。それは多種多様の文字が書かれているシャツであり、文字使いとか、かなりの拘りを感じられる出来栄えになつていて。というか普通に格好良い気がする。天上天下唯我独尊とか、気合を入れるのに丁度良さそうだ。勝負下着ならぬ勝負シャツを仕入れるつもりで幾つか選んでみる。絶対に失敗できない時の為に「一発必中」とか。目出度いことがあつた日なんかは「当たり目」とか。あと大人の魅力を出したいなつて時は「危険日」とか！ 大人の危ない魅力を全面的に出しちゃうのだ、私に惚れると怪我するぜ！ それで幾つかのイケイケなシャツを手に入れて、ホクホクな私が屋敷に戻ると鶴の調子がおかしかつたので、ここは一つ景気付けに新しく買ったシャツを着込んで人生相談へと赴いた。男らしいところを見せるのだ、そしたらきっと彼女も私に惚れ直すかも知れない！ 頑張つて元気付けてあげるのだ！

——激おこぶんぶん丸。

†

翌日、調練から戻ると寝台に襯衣が置かれていた。広げてみると「私は駄目な人間です」と書かれている。

胸が少しキツかつたが、朝から話もしてくれなかつた葵が少しだけ口を利いてくれた。

第四話.

ひよんなある日、調練を終えて部屋に戻ってきた時のことだ。

隠していたはずの同性愛を書かれた小説が机の上で綺麗に並べてあつた。

とりあえず書籍を人目の付かない場所に移動させた後、無言で走り出す。とりあえず鶴^{馬休}のところへ、部屋の掃除をしたのが鶴だつたらまだ致命傷で済む。しかし偶然出会つた翠姉様に話を聞くと、鶴はまだ厩で馬を洗つているところのようだ。そういうえば、一緒に調練に出向いていたな、と。動搖すると冷静な判断が出来なくなるというのを身を以て思い知らされる。そして、合理的に物事を考えると私の部屋を掃除した人物なんて一人しか居なかつた。がつくりと肩を落とす中、鼻歌交じりで廊下を歩く少女。両手には食材を抱えており、どうやら買い物帰りということが見て取れる。

一縷の希望を持つて、恐る恐ると問いかける。

「私の部屋を掃除してくれたのって、葵？」

すると少女は満面の笑顔で「はい！」と元気良く頷き返す。

ああ、もう、嗚呼、と両手で顔を覆いながらその場に崩れ落ちた。これが单なる艶本なら此処までの絶望はない。しかし机の上に並べられていた艶本は私が手掛けたものだ。そして、その中には異世界に転生した少年が女の子になり、両性器具の女の子に攻められるという内容のものがある。言うまでもなく葵から聞いた話を元にしたものだ。そして、これは一種の夢小説のようなものであり、衝動のままに書いたものだから世の中に出せる内容ではない。ましてや本人に見せられたものだから世の中に出せる内容ではない。まじてや本人に見せられるようなものではなかつた。今日は葵と夜を一緒にする予定の日だつた。葵と目を見つめ合いながら優しく抱き寄せて、甘い夜になるかも知れないつていう願望もあつた。もちろん、現実はそんなに甘くないつてことは分かつていて。それでも妄想するくらいは許して欲しい、勝手に希望を抱く程度のことは許して欲しい。それが台無しになつた。私はいつもそうだ。この失敗は私の人生そのものだ。私はいつも失敗ばかりだ。私は色々な萌えに手を付けるけど、ひとつだけ

て現実で見たことはない。誰も私を愛さない。

ポンッと優しく肩を叩かれる。頭を上げると葵の顔があつた。

「私、ああいうの結構、好きだよ？」

それだけを言うと葵は上機嫌に台所へと向かつて行つた。

えつ？ 結構、えげつないのも書いていたと思うけど、えつ？

遠のく背中、ただただ呆然と見送つた。

†

異世界転生ものつて良いよね！

前世での私はネット小説と呼ばれるものも結構読んでいた。なんとか書籍とかだと身構えて読まなきやいけない気になるが、二次創作とかだと気軽に読める気がするのだ。たぶん気分の問題だけど、百万文字とか三日で読み切ることもあつたし、活字を読む事を苦になかったのも強い。前世の私が好きだったのは悪役令嬢ものだつた。男主人公よりも女主人公の方を読む方が好み。ああでも男は基本的に馬鹿だとか、相手の事情を考えない俺様系は苦手だ。ああいう強引な人を好いちやう人の気持ちはよく分からない。でも好きだから独占したいとか、そういう嫉妬染みた感じだと少し可愛いとか思っちゃうから不思議だ。どうにも自分は強引過ぎるのとか、決めつけだとか、そういうのは苦手なようだ。私だって男だ。エロいのは好きだ、女の子が好きだ。受けよりも攻めの方が好きだ！ 経験はないけども勝手に決めつけて欲しくない。私は攻める男なのだ。

さておき、異世界転生ものも結構な数を読んでいた。

だから蒼の部屋を掃除していく時に発見した小説は懐かしく感じられた。それは異世界に飛ばされた元男の少女がたつた一人でも挫折せず、色んな人に助けられながら新しい世界で生きていく物語。なんとなしに私と似た境遇の主人公に感銘を受けて、もつと頑張らなきやつて思った。やっぱり女の子になつたからつて急に男に興味を持つようになるはずなんてないよねつて共感を得たり、何か身体的な悩みを抱える女の子とも良い感じになつてたし、もうちよつと読んでいたいなつて思つたけども他にも掃除しなくちゃいけないから程々のところで中断した。後で蒼に貸して貰えば良いかなつて、そう

いえば、主人公の名前が奏で私の名前と字面が似ている。そういう意味でも親近感が持てた。ヒロインの名前も碧で、蒼とは青色繫がりがあつたりと不思議な偶然を感じちゃうなー。

台所で料理をしていると「私は駄目な人間です」と書かれたシャツを着た鶴が気不味そうな顔で手伝いに来た。

仕方ないから少しだけ許してあげる事にした、チョロい奴とは思われたくないでの少しだけだ。

†

夕食後に改めて読み返すと自分自身でも引いやう内容だった。うつわ、こんなのが書いてたつけ？これを読んでも結構好きつてどういうこと？あんな無邪気な子がこれを読んでも平静でいられるつてどういう神経してるんだろ。実はむつりさんとか？性欲強かったり？それはそれで滾るんですけど、あんなに小さい子が性欲に従順。やばい、背徳感が半端ない。それだけでこれから先の数ヶ月、自慰のオカズに困ることがなくなりそうだ。

悶々とした想い、今日は葵と一緒に寝るというのに耐えきれそうにない。一度、性欲を発散しておいた方が良いだろうか？葵が来るまでに、と股間に指を這わせる。すると既に下着が少し湿っていた。その事に自分で、うわつ、と軽く引いた。そういえば葵つて他二人とも寝てるんだっけ？今日、夕食を食べている時に鶴が「私は駄目な人間です」と書かれた襯衣を着せられていたので、もしかしたら手を出してしまったのかも知れない。でも葵もあんまり怒っている様子もなかつたので満更でもなかつたりするのかも知れない。それともただ単に葵が単純な性格をしているだけだろうか？葵の事を想いながら、昨晩と一昨日に行われていたかも知れない情事を想いながら指を動かす。やばい、これ、やつぱい。荒くなる息にギュッと目を閉じる。もう我慢できなくなつてきて、服を全部脱いで大股を開いた。自分を慰める時は大胆な姿勢を取つた方が気持ち良かつた。上気する体、昂ぶる心、もつと、と心と体が欲している。だから衝動の赴くままに指を這わせようとした。

こんばんは、という可愛らしい声と共に扉が開かれた。

「うわあ……すつゞ……」

しつかりと見つめられた後、おずおずと扉が閉じられる。

「待つて、違うから! これは違うからッ!」

「私は何も見てないから、だから、ね? 今日は私、翠の部屋で寝るから」

「待つてつて言つてるのに……!」

「蒼、裸で出て来ないでッ!? あッ!!」

逃げ出そうとする葵の手首を掴んで、そのまま部屋まで連れ込んだ。

+

切に、切に状況を説明して欲しい葵なのです。

目の前に女の人の裸があつた。でつかいのが二つもあつた。

とりあえず深呼吸、状況を整理する為に少し遡つてみよう。

私、葵は今日も今日とて是否枕を抱き締めながら誰かの部屋へと潜り込む。今日、向かうのは蒼の部屋、姉妹達の中で最も胸が大きくて、ゆるっとふわっと包容力が強い御人だ。扉の前まで辿り着き、扉の取っ手に手を掛けようとして、軽く深呼吸をする。察しの良い私は気付いている。先ず最初に義親の馬騰こと鶴が告げた「うちの娘の内、誰でも良いから抱かれて来い」という言葉、そして義姉妹達の前で告げた「この子を貴女達の誰か一人と婚姻して貰うから、そのつもりで」という発言。加えて、二日連続で続いた義姉妹達の狂行を鑑みるに、これら全てが本気だつたということはもう確実だ。たぶん、今日もまた私は抱き締められてキスをする。しかし、私には既に何度もキスを交わした経験がある。そうだ、つまりキス童貞の蒼に比べて、私には一日の長がある。つまり、これはもう勝ち確なのだ! 今日は唇の手入れも丹念にしてきたし、ちょっとキスの練習もしてきた。さくらんぼを口の中で種を付けたまま綺麗に結ぶことができたのだ、えつへん。んべつて翠に見せると頭を撫でて褒めてくれた、鶴は何故か顔を赤くしていた。勝負下着もバツチリで、今日は「やればできる女」シャツを着込んでいる。そうだ、私はやればできる女である、今は元男だけど。

パンと両頬を叩いて気合を入れる。そして、ガチャツと扉を開け放つた。

「こんばんは！」

すると目に飛び込んできたのは全裸で大股を開いた蒼の姿だった。そつと扉を閉じる。

えつ、なに？ 今のつて、えつ？ すぐかつた、うん、とてもすごかつた。

扉を背に座り込み、両手で顔を覆いながら地面にへたり込んだ。胸の動悸が治まらない、やつぱいものを見た。自慰をした事もある、河川敷のエロ神様が残してくれた雑誌を読んだ事もある。しかし、今までの価値観が塗り替えられてしまう程に、なんか凄かつた。時々、SNSで女性が「心のちんこが勃起した」なんて言葉を使うことがあるけども、なんか今、その気持ちがすづくわかる。なんというか、もどかしい。今はなき息子がない事がとてももどかしかった。なんとなしに前のめりになりながら、そおつとその場を離れようとする背後の扉が勢いよく開け放たれた。

「待つて、違うから！ これは違うからッ！」

全裸の蒼が隠そうともせずに突っ立っていた。

詰め寄つてくる、ブルンと胸が揺れる。ズンズンと大きなメロンが迫つてくる光景は圧力が凄かつた。

いや、待つて、ちょっと待つて。

「私は何も見てないから、だから、ね？」

興奮した馬を宥めるように両手を前に出し、熊と遭遇した時のようゆつくりと距離を取る。

「じゃっ！ 今日は私、翠の部屋で寝るから……」

十分に距離を取つたところで逃げ出そうとしたが「待つて！」と間合いを一瞬にして零にしてきた。バルンと目の前で揺れる胸団の暴力、いや、これ全然えつちいくない！

「蒼、裸で出て来ないでッ!?」

咄嗟に振り払おうとする手を止められて、力のままに部屋へと連れ込まれた。

急に景色が変わり、おつとつと、と姿勢を立て直しているとガチャヤリと音がした。扉の前には全裸の蒼が居て、後ろ手に取つて辺りを捻っている。あれ、これって閉じ込められた？ 巷でよく見たセックスしないと出られない部屋かな？ ちょっと物理が強すぎる気がするけども。隠すべくを隠さずに詰め寄つてくる蒼に、私も唾を飲み込んで覚悟を決める。今日の私はやればできる女なのだ、元男だけど。略して、やれる女。この程度の危機なんて、簡単に突破してみせる。そうだ、合わせて、簡単にやれる女だ！ ふんす、と鼻息を荒くして気合を入れる。どうせ、されることなんて分かっている。口付けなら鶲との一戦で幾度と経験した。つまり百戦錬磨の実践を経た私はキスの達人なのだ！ キス素人の蒼になんて絶対に負けないんだから！

詰め寄られる。蒼の目が完全に獲物を見据えるソレと同じものになつっていた。そのことに若干の気後れがあり、しかし凜然と胸を張つて迎え入れる。ちよつと怖かつたから目を閉じる。さあ、どこからでもかかつて來い。さあ、覚悟はもうできている！だから、覚悟が萎えない内に早く！ ドキドキと高鳴る鼓動、じつと見つめられている感覚があつて、少し擦つた。時折、肌に息が吹きかかり、優しく抱き寄せられた。来た、と思った。口付けされると思った、だから受け入れられるように少しだけ唇を押し出す。歯が当たつたら痛いから、鶲の時にちよつと唇を切つちやつたし、そのまま待ち続けること數十秒、待つても待つても来ないから、アレ？ つて思つて目を開こうとすると唇を重ねられた。

ふぐッ!? くぐもつた声が出る。にゆるりと口の中に冷たいものが入り込んできた。やだ、何これ、なにッ!?

舌を入れられた、と氣付いた時には全身を使つて暴れていた。口の中を暴力的に蹂躪される。舌で押し返そうとすれば、絡め取られて、それでもと強く押し込んだら逆に吸われてしまつて体が跳ねた。視界が火花が散つたように瞬き、その間も骨が軋む程に強く抱きしめられながら口の中を舌が蠢いた。口が離される、思いつきり酸素を吸い込んだ。まだ目がチカチカする。気付けば、ベッドに押し倒されてい

る。大きく上下する自分の胸、内側から叩きつけるような鼓動、そして私の上には蒼が名残惜しむように口元を舌で舐め取っている。そして休憩も程々に蒼が顔を近付けてきた。絶対に負けないから、と意思を総動員して、蒼の首裏に両手を回して抱き寄せる。ギュッと唇を押し付けて、チュッと吸い上げる。

「どうだ！」と勝ちを確信した笑みを浮かべてみせる。

「…………今の良かつた…………」

全然、効いている気配がない。

妖艶に細める目は、ただただ私だけを映している。

私は悟る。そして、懇願する。

「…………優しく、お願ひします」

「誘つたのは、葵だよ？」

全然、優しくなかつた。

†

やり過ぎた。

空が白じんできた時間帯、汗と体液で湿つた寝台には仰向けになつたまま体を痙攣させる葵の姿があつた。なんというかムラツと来る。やばい、相手から誘つてきたとはいえ、やり過ぎた。声を掛けると辛うじて、意識は保つていたのか、水、と一言だけ告げる。それで予め用意していた果汁水を口に含んで、葵の体を抱き起こしながら口移しで飲ませる。全身を脱力させているせいか、葵の体は何時もよりも重く感じられた。やり過ぎた。助けを呼ぼうとしてたから、ずっと口を塞ぎ続けていた。でも仕方ない。だつて、最初にキスをする時、葵は受け入れ態勢万全だつたし、目を閉じた後、これ見よがしに首筋を見せつけてきたのだ。赤い痕がいくつも付けた首筋を。あんなのを見せられて、黙つていられるはずなんてない。むしろ私の色に染めたくて、上書きしてやりたくて、こういうのつて寝取りつていうのかな。とにかく私の物にしたかったのだ。でも、やり過ぎた。今日は優しくしよう、仕事は休みにして、葵の分の家事を代わりにしよう。ああでもない、こうでもない、仕方ないじやない、ぐるんぐるんと回す思考に、チュツと小さな音が聞こえた。チュツチュツと何度も舌を吸つて

くる。ちょっと誘導してやると葵は自分から私の口の中に舌を入れてきた。なんで、こんなに積極的になつているんだろうか。舌を絡める、というよりも口の中を舐め取られる感じだ。暫くすると葵はほんの少しだけ眉間に皺を寄せて、口を離す。そして、喉乾いた、と小さな声で告げる。もう一度、口に果汁水を含んで飲ませてやると葵はちょっとだけ嬉しそうに果汁水を嚥下し、また口の中を舐め取り始めた。そこで漸く、葵が積極的になつてているのは口の中が甘くなつているせいだと気付いた。一生懸命、舌を吸つてする葵がいじらしくて、可愛らしくて、あと少し、もう少し、と思っている内に太陽が高く昇る。それは部屋の中まで押し行つてきた姉様と鶲に引き剥がされるまで続けてしまつていた。

程なくして調練の時間、引き剥がされてから葵は会つてもくれなかつた。意氣消沈する中、部屋で身支度を整えた後の話だ。部屋を開けると何かが扉の開けた先に置かれていた。襯衣だつた。広げてみると「私は駄目な人間です」と書かれていた。ああ、なるほど、こういうことだったのか。その日、私は胸が苦しい思いをしながら調練に出る。

周りから視線を浴びる中、次はもうちょっと自制心を持とうと決意した。

第五話.

翠、鶲、蒼の三人と共に過ごした後、更にもう一周して流石の私も自覚した。

きっと私は近々犯されることになる。昼間だと好意の方が強い視線も、夜が近付くに連れて、もつと言えば、その日、夜を共にする相手が獲物を見るような目で私を見つめてくるのだ。まるで猛禽類が生き餌を前にして涎を垂らすかのように、ベッドは俎板で、私は鯉だつた。流石の私も貞操の危機だつていうことはわかる。童貞の前に処女を失いそだつていうことは分かる。今、息子ないけど。男に抱かれるくらいなら男性器を生やした女の人に抱かれる方が数倍ましだつて気持ちもあるし、結婚するのも男じやなくて女の方が絶対に良い。その点で云えど、私は恵まれた世界に来れたと云える。いや、不幸中の幸いと云つた方が正しいか。転生するなら男のままが良かったし、挿入れられる方よりも挿入れる方で居たかった。異世界に来た事には、あまり難しく考えていない。異世界に来たなら来たで仕方ないと思うし、そもそも私は元の世界に対する未練が少なかつたりする。それには中学生くらいの時から親はあまり家には居なかつたし、高校生になつてからは家を出てしまつている事が大きく関わっている。それでも友達とか、知り合いには申し訳ないなつて思つたりするけども、躍起になつてまで元の世界に帰りたいとまでは思わない。機会があれば、その時に考え方とか、そんな感じだ。少なくとも美人な三姉妹に迫られている状況は嫌ではない。むしろ好ましい。これが女としてではなく、男としてだつたなら尚のこと良かつた。なんとなしに前の世界で男からラブレターを貰つたことを思い出す。いや、私の性的嗜好は女ですし、逞しい男に興味はないですし、守られるよりも守りたいって思いますし、それに男でも女でも構わないみたいな言い回しは好きくない。私は男だ、少なくとも前世では男という自覚を持つて生きていた。それが私のアイデンティティとして象られていたことは紛れもない事実になる。だから私のことを女として見る者を毛嫌いする。今は肉体が女になつているから折り合いを付

けようと頑張つてゐるけども、やつぱり女性として見られることには慣れない。ましてや、子作りとまでなると忌避感の方が強い。翠も、鶴も、蒼も好きだ。現時点での印象だけで言うなら結婚しても構わないって思つてゐる。しかし子供を作りたいとまでは思えない。だから私は思つてゐる。しかし子供を作りたいとまでは思えない。だから私はまだ三人が望むような関係になる覚悟がなかつた。いずれ、そうなる。とは分かつてもこればかりは心の整理が付けられないでいる。私は女である、しかし私の心は男のままだつた。

馬騰、翡翠の部屋に寝泊まりして三日後のことだ。

「私は馬岱。もう皆、真名を交換しちゃつてるから私も預けちゃうけども蒲公英だよ。これから宜しくね」

翡翠の姪、そして翠達の従姉妹に当たる蒲公英が屋敷の住人として新しくやつて來た。蒲公英は私の事情を知つてゐるようで、従姉妹達には聞こえないようにひつそりと、いの一番に訊いてきたことは「で、本命は誰?」ということであつた。その時、パツと思い浮かんだ相手は居なかつた。全員という答えがない訳でもなかつたが、いまいち仲睦まじく愛し合つてゐる未來が想像できない。それで答えに窮していふと「あー、んー、駄目じゃん」と蒲公英は呆れたように溜息を零す。「あいつらつて皆、脳筋だからねー。御姉様は勿論、鶴も蒼も五十歩百歩だし?」

うんうん、と蒲公英はひとり納得するように頷くと「叔母様からも葵のことを支えて欲しいって言われてるからね、それなりに頼つてよ」と肩を叩かれる。どうやら彼女には私を結婚相手、つまり子作りの対象として見る意思ないようだ。その事実だけで、ほうつと安堵の息が零れる。義姉妹と同衾するようになつてから毎夜、まともに寝られたことがなかつた事もあり、ちょっと眠たくなつて來た。でもまだ家事が残つていたから挨拶も程々に、さつさと終わらせてしまおうと足を運んだ。

「あれ?」

ふらりと体がよろめいた、それはちよつと頭が眩んだだけに過ぎない。

「よつと」

しかし、そんな私の体を支える者がいた。

私の肩を片手で掴んで抱き寄せられる、ビクリと身を硬ばらせる。こんな時、咄嗟に身構えてしまうのは義姉妹の好意を受け止めてしまった結果だ。しかし、私を支えてくれた少女は、私の無事を確認するに呆気なく私を手放した。義姉妹の少し羨む視線を受けながら「貴女、大丈夫なの？」と下心なく問い合わせてくれる。なんでか言葉が詰まつた、代わりに力強く頷き返すと蒲公英はいまいち納得していない様子で顔を顰めた。その好意を伴わない心配が新鮮で心地良い。

その日の夜、早速、私は蒲公英の部屋へと赴いた。

「ええ……っ」と引き攣った笑みを浮かべる彼女なんて無視して、手際よくベッドの端っこを陣取り、そのまま、くうつと瞼を閉じる。その日、何事もなく、一週間ぶりの安眠を得ることができた。好意を向けられるのも良いのだけど、そうやつて愛情ばかりを押し付けられるのは、やつぱり疲れちゃうものだ。この部屋は私にとつてのセーフティゾーン、それから事ある度にお邪魔することになる。迷惑をかけちやつている自覚はあるので、お手製の菓子とか包んであげたりとか、御茶を淹れたりとかして縁が切れないように御奉仕するのも忘れない。というか見捨てられたら私の身と心が保たない。そんな私の気持ちを知つてか知らずか、蒲公英は溜息混じりに私のおもてなしを受け取つてくれるのだ。

勿論、義姉妹達にも菓子を用意しますよ。ついでだけど。

†

最初、初めて手紙が届いた時には、翡翠母様が馬鹿になつたのかと思つた。

いやだつて久しぶりに馬氏本家から来た手紙が「拾つた少女を娘達に嫁として与えたら揃いも揃つて恋煩惱になつた」とかいうことが書かれていたのである。いや、ないわ。何処の蒼の同類が書いた小説だよ、と。しかも少女は、天の御使い疑惑があり、天の国では男だつたと主張している。とか、なんとか？　いや、今時そんな設定とか流行らないし、誰もやらないつて。でもまあ困つている事は確かなようだ

し——少女は日に日に元気をなくしていつているらしい——、分家筋の私が本家当主の翡翠母様に逆らえるはずもなく、本家の要請に従う形で屋敷へと赴いた。

そこには前に挨拶した時にはいなかつた人物が一人、馬家特有の茶髪ではなく、真っ黒な髪と瞳をした少女が混ざり込んでいた。彼女が手紙に書かれていた少女だと察するのは難しくない。なにより乙女ではあつても女らしくない馬家一門の中で、彼女だけがとびきりに女らしかつた。いや、彼女が元男つて嘘でしょ、これ。ちょっと私、女としての自信なくすんだけど？ 仕草とかがいちいち女っぽくて、なんというか凄くあざとかつた。これが無意識なら超ド級の天然ものであるし、これが意識してのことだつたら、それはそれで末恐ろしいものがある。

自己紹介の時に本家当主と真名の交換をしていることが分かつたから私とも真名を交換しておいた。異民族とも付き合い多いし、司隸に住む連中ほど真名に固執もしていない。少女、葵もまた快く真名を交換してくれた。

さて、手紙に書かれていた元気がないつていう話は本当だつたようで、顔に活力がなかつた。なんとなしに氣疲れしているような感じ、それで注意深く観察していたら案の定、足元をふらつかせて危なつかしかつた。咄嗟に手を差し出すと、何故か従姉妹達から嫉妬を込めた目で睨まれた。いや、むしろ、そこは感謝されるところでは？ 兎にも角にもウチの馬鹿達が色々と拗らせていることは理解した。そして、その原因として葵が関わつてている事もわかつた。

なら、どうするのか。とりあえず尋問である。どうせ、この馬鹿な従姉妹達がやらかしたんだろう。と当たりを付けて、葵抜きでお話をさせて貰つた。ひと通りの話を聞き終えた時、従姉妹達は揃いも揃つて正座をしていた。

その日の夜、葵が部屋に来た。

普通、初対面の相手のところに来るかな？ そんな私の疑問に答えもせずに、さつさと寝台の端を陣取つて眠つてしまつた。あまりの寝付きの良さ、その無防備さ加減に呆れながら溜息を零す。何度か頬を

突いても起きないところを見るに、どうやら本当に眠かつたようだ。今日の昼間、尋問中の従姉妹達の姿を思い返して、「あつこれ、夜に寝かせて来なかつたな」と察する。翌日、追加で説教をする事を決断した。

私、そういう感じじゃないんだけどな。と思いつつ従姉妹達の馬鹿さ加減に呆れながら。

それから更に刻が過ぎる。

葵に懐かれた。本人に自覚があるのか分からぬが、屋敷に戻るとベツタリだ。

事ある度に挨拶して来るし、屋敷に戻るといの一一番で出迎えに来るし、週に何度かの頻度で菓子を手渡して来るし、そして、その度に従姉妹達からの視線が痛く感じられた。ついでに言えば、夜中、私の部屋に添い寝を頼みに来る頻度は従姉妹達と比べて多い。具体的に云うと、二、三日に一度の頻度だ。週に一度、多くて二度の従姉妹達と比べると格段に多い。とは言つても葵はほとんど寝に来るだけだし、偶に御茶と菓子で愚痴を聞かされるくらいなのだ。翠は力加減ができるけど、鶴はまともそうだけど火が点くと止まらないとか、蒼は性欲に忠実過ぎるとか、何が悲しくて従姉妹の性生活を聞かなくてはいけないのか。いや、ほんと接吻で終わっている辺りが情けないというか、なんというか。というよりも本人、好意を向けられることが自体は嫌がつていないのでから、性欲を少し抑えるだけで簡単に靡きそうなところが本当に馬鹿らしかつた。まあ教えてあげないけど、茶番染みてるなあ、と思つたりもした。

葵の私物が増えつつある部屋、全体の三割程度が侵食されている。葵が部屋に来ない夜は、何時も葵が陣取つてゐる場所に顔を埋めた。そして葵の変な文字が書かれた襯衣を嗅ぎながら自慰に耽る。いや、溜まるつて性欲、ずっと生々しい性事情を聞かされ続けているのだから。そして今もまた従姉妹の誰かのところで好き勝手されていることを思いながら下腹部に指を伸ばす。

葵は従姉妹の誰かと婚姻する。それは分かつてゐる。だから、この気持ちは單なる情欲に過ぎない。彼女の話に興奮しているだけに過ぎ

ぎないのだ。それは艶本を片手に自分を慰める行為と大差ない。そういう言い聞かせる。もしも私が勘違いを起こせば、それは誰も幸せにならない結末になる。それが分かつていてるから私は絶対に間違いを犯さない。自慰に耽る時、ただただ性欲の対象として葵を見る事を強く意識した。そして翌日、何食わぬ顔で葵と顔を合わせて、何時ものよううに愚痴を聞いたり、ベツタリと引っ付く彼女に呆れたりする。

私は葵の息抜きの役割を担っている。

それで良いと思うし、そうあるべきだつた。

第六話。

黄巾賊が世間を騒がし始めた頃、

私、馬騰翡翠は万が一に備えて、諸侯と連携が取れるように使者を送ることを決意した。

少し前までなら涼州から出て行けると喜び勇んで馬に乗つていた娘達は、何故か今回に限つて出向こうとしなかつた。それもそのはずで全員が互いに互いを牽制するように視線を送り合つてゐるのである。いや、うん、良いことなんだけどね。私が仕向けたことなんだけどね。ちょっとのめり込み過ぎじやないかな、と御母さん思う訳です。やつぱり私には子育ては難しかつたようだ。現実から逃避すること数分、とりあえず娘達の派遣は保留にして、姪の蒲公英馬岱に話を持つて行くと「私は良いけどー、葵が保たないと思うよ?」と彼女は困り顔で答えた。試しに葵の前で蒲公英を派遣する話を持ち出すと、まるでこの世の絶望のように顔を曇らせた。いや、私の娘達は葵に何をしたんだと。娘達を集めて問いかけると全員が無言で目を逸らす、その反応で蒲公英の派遣は取り消した。

結果として諸侯には手紙を送るだけに留めることになつた。相手は劉虞と公孫賛、陶謙。他には劉表や孫堅等々。董卓とは常日頃から連絡を取り合つてるので今、特別に手紙を書く必要はない。どうでも良い話になるのだけども劉虞つて、幽州刺史になる予定だつたのに公孫賛に譲つてたりする。んで今は御隠居様を気取つて、面倒な事は全て公孫賢に丸投げして悠々自適な生活を送つてゐるようだ。偶に気が向いたように手紙を送つてきては、その暇を持て余した生活を自慢してくる。私だつて、そうだつたんだよ。月がいる間は御隠居様を氣取つていたんだよ。でも月が并州に行つちゃつたから、詠が月に付いて行つちやつたから、残された私が出張らざる得なくなつた。「伯珪ちゃんは良い子だよー、何処にも行かないしねー」と手紙が送られるくる度に書かれている。殴りたい。返事を書かなくても手紙を送つてくる。蹴飛ばしたい。

閑話休題。

政治に巻き込まれないように馬家だけを取り締まってきたが、流石にそれも限界が近付いてきたかなと思う今日この頃だ。現涼州刺史の耿鄙は良くも悪くも働かない無能であり、軍事に関しては馬家がほぼ一任されている。また政治に関しても誰彼に任せてしまっているのが現状で、任された文官も無能ではないが有能とも呼べないような人物だ。漢民族思想に浸かり切っている奴なので異民族とは頗る相性が悪い。今はまだ月の影響が残っているので全ての羌族が攻め込んでくることはない。だが、その影響も何時まで保つか分からなかつた。正直、政治に関わりたくない。しかし、もう少し涼州軍が快適に戦える下地作りをしたいた方が良さそうか。その場合、問題になるのは馬家で動けるのが私だけであり、ただできえ面倒でやりたくもない書類仕事が増えるという点だ。

何處かに政治を代行してくれる人が居ないのかな、と溜息混じりに愚痴を零せば、偶然、新しい御茶を淹れていた葵がふと口を開いた。

「涼州の軍師と云えば賈団先生ですよね？」

「賈駆は并州に行つちやつたけどな。つて、賈駆の話をお前にしたことあつたか？」

「後世だと賈団先生つて凄く有名ですし、この時代だと最強軍師の一角に数えられる程ですよ」

ああでも、なんか歴史が滅茶苦茶になつてゐみたいですから参考程度ですけどね。と葵は付け加える。そういうえば葵は此処と似ているが、全く別の異世界から来た。とか言つていたような気がする。もしかすると今はまだ名を知られていない者達も知つていたりするのかもしれない。ものは試しと問い合わせれば、今から十年先の話になりますが、と葵は自分が知つている事を話し始めた。

「天水郡、今はまだ漢陽郡でしたつけ？まあそこに姜維つていう軍師が居ますね、涼州だと三番目くらいに有名な人です。この世界だと、なんだか時間が圧縮されている感じがするので、もしかするともう産まれているかも知れません」

話半分、とりあえず天水郡の近くに行く機会があつた時に探してみることにする。

「ちなみに一番は?」と興味本位で訊いてみると「董卓です」と間を置かずに返された。

さて、それなりの月日が過ぎて、天水郡に訪れる機会があつた。その際に私は姜維という名の人物を探したのだが、確かにその人物は存在した。しかしもう母と共に益州へと向かつた後だつた。また他にも金城郡の閻行も葵から話を聞いていたが、これもまた韓遂に取られており手遅れになつていた。だが、これで葵の話には信憑性が出てきた。屋敷に戻つた私は早速、まだ世に出ていない者達の中で優秀な者を聞き出そうと葵に話しかけた。

「えー、もう居ませんよ?」

目の前が真つ暗になつた。

†

最初は口だつた。次に首筋で胸、そして今はお腹だ。

その次は言わずもがな。唾液を練り込むように開発される体は否応なしに自分が女であることを突き付けられる。今の自分は歴とした女だ。それは理解していても心の方が追いつかなかつた。甲高い嬌声が上がる度に体が作り変えられていくのがわかる。それが恐ろしくもあり、一線を越える度に大した事がなかつたように受け入れられて、体だけではなく心もまた自分以外の何者かになるようで怖かつた。だから私は今日も蒲公英の部屋に足を運ぶ。

蒲公英は私を襲わない、ただ私のことを受け入れてくれるだけだ。お風呂に入つている時も変な場所を触つたりして来ないし、顔を真つ赤にして食い入るように見てくることもない。だから蒲公英の側は安心することができた。それに翠や鶲、蒼は捕食されるつてことに意識が向いちやうけども、落ち着いていられる分だけ、女の子と一緒に寝ていることが意識させられる。それは俎板の上の鯉とは、また違つたドキドキで、近頃は布団に入るなり寝たふりをしてやり過ごす。

ぶつちやけると蒲公英に手を出したい気持ちはあつた。しかし他から避難して来ているのに自分から蒲公英を誘うのは間違つてゐるし、なにより蒲公英の信頼を裏切りたくない。だから背中越しに蒲公英が寝息を立てる事を聞いてから自慰に耽る。開発されつつある体

は欲情しやすい。必死に声を殺しながら軽く達し、落ち着いたところで眠りに就く。それが蒲公英の部屋で眠る時のルーチンだつた。荒い息を零しながら蒲公英の顔を見やり、欲望のまま、安らかな寝息を立てる蒲公英の頬にキスをする。

ただ唇を落とすだけの質素なものだ。満足感と罪悪感に微笑み、ゆつたりと体を寝かせる。

†

寝台を共にする友人が、私の名前を呼びながら自慰に耽つて時つて、どういう顔をすれば良いのだろうか？

しかも最後に頬にキスまでしてくるし、その気がなくともその気になる。あーもう、ムラムラしてきた。ゴソリと体を動かして、じいつと葵を観察する。寝ているだろうか？ 暫くすると寝息が聞こえてきたので寝ているようだ。体を起こして、そうっと私に背を向ける葵の横顔を見つめる。相変わらずの幼い顔付きだ。こんな子がつい先程まで忍ぶように自分を慰めていたなんて信じられない。……起きているのだろうか？ ツンツンと頬を突いてみる。少し眉を顰めた程度で特に反応はない。……いや、と首を横に振る。大きく深呼吸をして、彼女から背を向けた。彼女の前で、そういう真似はしたくない。布団を深く被つて、ギュッと目を閉じた。

明日、また改めてすれば良い。と、そう自分に言い聞かせて、無理やりにでも眠る。

†

翌日、私は散歩がてらに街中を歩いていた。

護衛には蒲公英が付いている。涼州軍を取り仕切っているのは翡翠であり、小分けした部隊を率いるのは義姉妹達だ。蒲公英は助つ人として参戦することはあるが、他の四人と比べると仕事が少なかつた。だから、こういう時に私と一緒にいるのは蒲公英であることが多い。今日は何時もと比べると、ちょっと素つ氣なかつた。朝から口数が少ないし、だんまりな横顔は少し艶っぽい。チラリと視線が合う度にトクンと胸が高鳴つてギクシャクする。なんというか気不味い、やつぱり怒つているような気がする。

なんとなしに不機嫌な蒲公英に意識を向けているとドンと肩をぶつけてしまった。

あうつと身が撥ね飛ばされる。地面に倒れてしまいそうな体を、何時しかと同じように片手で受け止められる。前を向くとゴツい体付きの男が居て、「おうおう姉ちゃん！」と因縁を付けて来た——が、それは数秒と保たず、顔色を青褪めさせる。背筋がゾワゾワと来る感覚、私の体を片手で抱き寄せる蒲公英が、何時もの陽気さをかなぐり捨てたかのように男のことを殺意を込めて睨みつけていた。

「で、どうする？」とドスを効かせた声に男はそそくさと離れていた。

「あ、ありがとう……」

「……もうちよつと、しつかりしてくれない？」

トンツと体を突き放される。そして勝手に先を進んでいった。また胸に残る高鳴りの意味を考える間もなく、慌てて蒲公英の背中を追いかける。相変わらず、機嫌が悪そうだ。どうしたら機嫌を直してくれるだろうか。あーでもない、こーでもない。と必死に考えを巡らせてみると、ふと振り返った蒲公英の口元が笑っているように見えた。もしかして、機嫌を直してくれたのだろうか。試しに蒲公英の名前を呼んでみると「何？」と冷たい声で返される。やつぱり氣のせいか。と思つて彼女の機嫌を直す方法を改めて考え直す。

†

最初はちよつとした八つ当たりだつたけど、葵を振り回すのは樂しい。

†

私、翡翠は今、葵の言葉を頼りに人材探しの旅に出ている。

とはいっても遠出する訳でもない。実際、葵が新たに教えてくれた三人の内二人は近場に住居を構えており、共に優秀と呼べる能力を持つ人材であった。名は傅幹と張繡と云う。特に傅幹は知略に優れており、政務に関しては大いに期待できる。張繡もまた文武両道を行く名将であり、二人の加入は馬家、強いては涼州軍の力を底上げしてくれるものであつた。

であればこそ三人目にも期待が寄せられるというものだ。

隠居生活に大きく前進する新たな人材の登場に鼻歌交じりで馬を走らせていると目的の村に辿り着いた。此処には西涼の錦と呼び讚えられる翠と同格の猛者が居ることだ。正直、あまり信じられる話ではない。翠の武力に太刀打ちできる者が、この大陸に居るとは思つていなかつた。少なくとも私が今まで見てきた官軍の中では翠を打ち負かすことができる存在は居ない。その武勇は楚漢戦争における黥布に匹敵する。そう感じさせる程に翠の武力は圧倒的であつた。もし仮に翠と肩を並べる程の武勇の持ち主が居るとするならば、翠が錦と称されるように一目見てわかる存在感の持ち主なのだろう。少なくとも私は、そのように考えていた。

翠の武芸には華がある。

「……私に、何の用ですか？」

しかし今、私の目の前に居る幼子は、とてもじゃないが翠と同格には思えない。戦場を知らないようなあどけない顔に、儂く消えてしまいそうな薄水色の髪。そして赤茶色の瞳。少女はポケツとした顔で私のことを見上げてくる。こんな少女が？　いや、しかし、と傳幹と張繡の事を思つて考え方を改める。実際に彼女は存在したのだ。となれば、彼女の才覚は見極める必要がある。そうと決まれば、と私は幼子に手を差し伸べた。

「龐徳、私と一緒に来てくれないか？」

幼子は独り身だつた。

口減らしで村から追放されており、今日までたつた一人で生きてきた。

その為、少女には身寄りがない。

「御飯が食べられるなら良いよ」

龐徳は小さく頷いてみせる。

さて、連れて帰るのは良いが、今、屋敷に連れて帰ると面倒な事になりそうだ。

というよりも今以上の混沌を招きたくない。なれば何処か適当な屋敷に匿うのが良い、そう思い至つた私は城都に幾つかある屋敷の内

一つを彼女に貸し与える。翠と肩を並べる程の武人、如何程のものになるか。まあ過度な期待はせずに見守れれば良いと思う、いざとなれば副官として書類整理をさせれば良いだけだ。
そんな軽い気持ちだつた。

†

連れてかれた。

養つてやると言われた。

ここを拠点地とする。

第七話.

退屈だつた。山暮らしの私にとつて、城都での暮らしは暇を持て余した。

まだ太陽も昇らぬ内から小屋を出て、半日以上も狩りに費やす毎日、時に村から人食い虎や熊の情報を得て、僅かな作物と対価に討伐する。時間が余つた時にだけ、水浴びとか、洗濯とか、兎に角、生きているだけで時間は浪費された。しかし城都では生きるだけでは時間浪費し切れない。馬騰から定期的に与えられた金銭で食料は手に入るし、料理はさておき掃除や洗濯は毎日する程の事でもない。日がなほんやりと部屋で待機している事が多く、窓から差し込む日光の温もりに包まれながらぼけつと、時間を浪費する。山に居た時はもつと、いや、のんびりとはしていた気がする。少なくとも時間を気にした記憶はあんまりない。此処の人達は皆、せつかちだ。まるで時間に追われるよう日々を過ごしている。何かをしなくては生きていられない、そんな風にこの街は作られている、気がする。

此処の暮らしへ私の肌には合わない。ただ積極的に何か行動を起こす気も起きない。

だからまあ気まぐれに散歩する。家に籠つていると駄目になる、外に出ると頭がすつきりする。ぽかぽかの太陽を肌に晒して、ふりふりつと全身を揺する。そして釣り具を片手に近場の川まで出向いた。川辺は涼しくて心地良い。釣りは良い。大きな岩の上から糸を吊るすだけで何かをしている気分になる。ふわっと欠伸をしている時も生産的なことをしている気持ちになるからお買い得だ。

時折、見知らぬ方に話しかけられるけども、それもお話を黙らせている。

「大蛇、こんな所に……ん？　んんっ？」

馬上より私の真名を呼ぶのは御主人様、私は彼女に養われている。

岩陰に適当に積み重ねた不躾な方々を見て、言葉を詰まらせた。別に殺してはいない、身包みは這い出るけど。山での暮らしの時から私の武器は拳だ。斧とかも得意だけど、熊師匠が素手だったから対等に

私も素手で武芸を学んだ。弱肉強食という自然の摂理を教えてくれたのも熊師匠だ。言葉は通じなくとも拳で語り合える仲だつた。そんな大恩ある熊師匠は私の御腹に収まっている、美味しかつた。山賊先輩ともよく手合わせした。男と戦う時は股間を蹴り上げれば良いと教えてくれた相手だ。御行儀良く頭を殴りつけるよりも簡単に無力化できる。足先にグチュツと潰れる感覚があつたら尚良い、効果的だ。威圧効果もある。

少し引き攣つた笑みを浮かべる御主人様は、馬を降りると二振りの木の棒を取り出した。

「いや、なに。武芸の心得があるようだつたからな。その力を確かめたくてな」

ほれつ、と木の棒を手渡される。

先は尖つてない。どうやら殺し合いが目当てではなさそうだ。御主人様が構えたのを見て、とりあえず棒を放り投げた。無造作に投げられた棒を驚きつつも打ち払う、その間隙を縫つて間合いを詰める。相手の懷に大きく踏み込んで、残つた足を引き寄せる。その勢いを拳に乗せて、鳩尾に叩き込んだ。熊師匠を一撃で倒し得るまで頑張つた一撃だ。ぐふつ、と御主人様はくぐもつた声を吐き出して、地面に両膝を着いた。……大丈夫、死んでない？ 前髪を掴んで顔を引つ張り上げる。良かつた、死んでなさそうだ。そのまま、パツと手を離す。地面に蹲る御主人様を見やり、思つていたよりも弱かつたな。と思いつつも、まあ無事そだからいいつか。とか思いながら、岩の上に座り直す。釣りは良い、座つているだけで生産的と見做されるのだ。戦いなんかよりも、ずっと良い。

尚、狩りは生産的な行動に含みます。

†

待つて、ちよつと待つて欲しい。

龐徳、つまり大蛇おろちの実力を推し量ろうとしたら一撃で倒された。これでも涼州の勇、英傑の一人として、数えられている。少なくとも娘の翠馬超が頭角を現すまで、私の武勇は涼州では一番だつた。なるほど、これは確かに別格だ。翠と同格というのも領ける。寄る年波に衰え

を感じているが、それでもまだ鶴や蒼に負ける程ではない。事務仕事が増えて鍛錬を怠つてはいるとはいえ、いや、しかしだ。私にも武人としての矜持がある、この結果は看過できない。肺に溜まつた空気をして吐き出し、無理やりに呼吸を整える。そして、ゆっくりと身を起こせば、在ろう事か、大蛇は釣りを嗜んでいた。武力に申し分はない。しかし、これは余りにもあんまりだ。彼女には教育が必要だ、文字の読み書きはできないと聞いている。しかし、それ以前に彼女には教養が必要だ。特に道徳とか、倫理とか、さておき、大蛇にはその辺りの教養が必要だ。暫く、大蛇の方の屋敷に泊まり込むか。そして、あちこちに連れ回さなくてはならない。あと私自身も肉体を鍛え直す必要がありそうだ。

お腹を擦りながら決意する。

†

不思議な蜂蜜。男性が使えば絶倫の精力を得て、女性が使えば男性器を生やすことができる不思議な蜂蜜だ。

屋敷を空けるということで翡翠から手渡された秘薬を前に、私、葵は溜息を零す。覚悟もまだ決まっていないのに、こんなものを渡されても困るというものだ。まだ息子への未練も断ち切れていないし、私の体が如何に女として開発されようとも、私の目に映る義姉妹達は依然として女性のままだ。女の身になつたとしても、やはり、恋愛的な意味合いで愛せるのは女だけなのだろうと思う。

そういえば、目の前にある不思議な蜂蜜。飲めば、誰でも男性器を生やせるという話だつたつけ？

ごくり、と唾を飲み込んだ。正直、性欲は溜まっていた。女性として発散させられているが、体は昂ぶるばかりで男性特有の射精感を得られない。それに義姉妹達との行為は快感を一方的に与えられているだけで、まあ、それはそれで気持ちいいけども、しんどいって気持ちもあって、気持ちいいけども辛かつた。だから慣れ親しんだ息子での自慰、それも自分のペースで行いたかった。あとついでに云うなら、こんな危険物を持つて義姉妹の部屋に行くとか、鴨が葱を背負うに等しい行いだ。何処かに隠す必要があるのだが、私室を持たない

私に安心して隠せる場所なんて何処にもない。そ、それにこんな怪しい薬とか毒味が必要だ。そうだ、そうに決まっている。肉体を変えてしまふ薬なんて、どんな副作用があるのか分からぬ。そんな危険な代物を義姉妹達に実験もなしに扱わせる訳にはいかないのだ。上手く生やすことができたら、それはそれ。万が一にも義姉妹達を妊娠させる訳にもいかないし？ その時はまあ今夜、義姉妹達の部屋には行けなくなるなどか。なんとか、かんとか。

そんな言い訳染みた想いから、私は蜂蜜を自ら舐めることにした。

†

部屋に戻ると泣きながら自慰に耽る葵の姿があつた。

蒲公英、と私の枕に顔を埋めながら股間から生やした何かを手で擦つてはいる。うん、これは、うん、どうしたら良いのか。とりあえず部屋に入り、カチャリと鍵を閉める。すると流石の葵も、その音に気付いたのか顔だけを私の方に向けた。目が合つた。未だに男性器を握り締めており、完全に硬直してしまつてはいる。どうして部屋に入ってしまったのか、どうして閉じ込めるような真似をしてしまつたのか。いつそ怒鳴り散らしてしまえば、どれだけ楽なことだったか。しかし自分もまた彼女の枕や私物で自慰に耽つていた経験があり、強く言うことができなかつた。そして葵の痴態から目を離すことができず、凝視してしまつてはいる。そんな私を葵もまた見つめ返してくる。重たい沈黙、ゴクリと唾を飲み込んだ。

こんなのどう対処すれば良いのか分からぬ。

「……どうして、私のところなの？」

思つていたよりも静かで、低い声が出た。葵は恥ずかしそうに目を逸らし、そして私の枕に顔を埋めながら呻くように答える。

「生やしたままだと、何してんだつて話だし……義姉妹には万が一も起こせないし……そもそも犯されそうだし……蒲公英の部屋しか行くところなかつたし……蒲公英、好きだし……」

言い訳を並び立てるよううじうじと告げられる。

本当に、どう対応するのが正解なのか分からぬ。翡翠叔母様が出掛けた当日に葵が私の部屋に居るつていうだけでも拙いのに、私の部屋

で自慰をしていたなんていう事実を知られてしまつたら、その時ももうおしまいだ。完全に従姉妹達との関係が壊れる、少なくとも拗れることは間違いない。かといって、この状態の葵を外に出すのも危険だ。間違いなく従姉妹達の餌食になる。そもそもだ、翡翠母様が不思議な蜂蜜を葵に預けたことは皆に知られていたりする。そのせいから今日は皆、分かりやすくそわそわしていた。従姉妹達は皆、葵の貞操を狙っている。そんな猛獸の檻に葵を入れるとかあり得なかつた。あり得ない、と考えている時点でもう、色々と私の中でも何かが壊れ始めている。元から壊れていたのかも知れない、籠が外れかけているだけかも知れない。それはもうよく分からなくなつていた。分かるのは葵の痴態から目を離せないで居ること、瞼に焼き付けるように肢体の隅々までを凝視する。胸の高鳴りの意味は何か、ただ単に欲情しているだけなのか。もし仮にそうだつたのだとしたら、なんか嫌だなと思った。そういう目で葵を見る自分が穢らわしく感じられた。でも、少し冷静に考えてみると今、穢らわしいことをしているのは葵の方だ。だから葵のことを怒鳴り散らす権利が私にはある。だけど、それをしてしまうと、もう一度と私に好機が巡つて来ないかも知れない。何を考えているのだろうか。最初から、私には機会なんて与えられていいなかつたはずだ。だから彼女をそういう目で見ることは、誰も幸せにすることはない。葵がじつと私を見つめている、何かを期待するようになると意識してしまうから、自分が抱いている劣情を嫌でも意識するからやめて欲しい。期待、してしまふからやめて欲しい。……喉が渴いて、声が出ない。だから、おずおずと片手で何か棒状のものを握る仕草をして、軽く上下に振つた。すると葵はパアツと明るく目を輝かせてみせた。ゴクリと唾を飲み込んだ。もう引き返せない、と自らに言い聞かせる。今までの関係が終わる、と自らに忠告する。勘当されるかも知れない、と自らに警告する。もう引き返せない、と自らに決意を問い合わせる。何が正しいとか、間違つてているとか、関係ない。もう我慢ができない。私のせいじやない。ずっと、ずっと、私を誘惑してきた葵が悪いのだ。彼女にはお仕置きが必要だ、調教が必要だ

だ。こんなふしだらな犬は躊躇ないといけない。歩み寄る、ふらふらと、歩み寄る。視線だけは確と葵を捉えている。彼女の頬を両手で掴んで上半身を持ち上げる。そして上から押し付けるように口付けを交わした。葵がうつとりと目を蕩けさせる。

そのまま、押し倒した。もうどうにでもなれって。

†

御主人様が屋敷に来た、暫く一緒に住むようだ。

礼節が大事だつて言われた。御飯を食べる時はいただきます、食べた後はごちそうさま。両手を合わせてお辞儀する。

今日の御飯は特別だつた、腸の肉詰めは美味しかつた。パリツとした皮に、ポキッと折れる食感の心地良さ。城都に来て、退屈は増えた。しかし食事の質は確実に上昇した。私にとつて食事とは塩で焼くか、塩で煮るか。そのどちらかしかない。それでも食べられるなら十分だつて思つていた。けど、そんなの嘘だ。御飯は美味しい。美味しいつて、こういうものを言うんだつて思い知られた。料理つて塩で焼いて煮るものを言うんじゃないんだつて思い知られた。腸の肉詰めから滴る肉汁はキラキラに輝いていて、まるでそれが美味しさが流れ落ちてゐるような気がして、先端を咥えてチュッと吸い取る。美味しすぎて死にそうだ。もう山暮らしできない。私、一生、此処で暮らす。故郷の未練なんて消し飛んだ。美味しいは正義、美味しいは幸福、美味しいは人生だ。きっと料理とは幸せを作る御仕事のことを行うに違ひない。人間が幸せを享受するのに難しいことを考へる必要はないのだ。ただ美味しい料理をお腹いっぱいに食べられれば良い。その為にみんな一生懸命、汗水を流して働いているのだと思つた。美味しい料理があるから城都の人達は、時間に追われるよう働き続けている。

翌日から社会勉強つてのをするんだつて、外に出て、色々なところを見て回る。それから勉強もするらしい。そうすると美味しい料理の作り方だつて分かると言つていた。だから頑張ろうと思う、世の中みんな美味しいでいっぱいになれば良い。

今から明日が楽しみだ。

†

翌日、ドンドンと扉を叩かれている。

私の隣には汗だくで全裸になつた葵が寝転がつており、荒い息を零すだけで身動きひとつ取らない。部屋は異臭で充滿している。布団はもう色んな体液でぐつちよぐちよでもう駄目だ。買い換えるしかない。床に転がる蜂蜜の瓶は空だつた。御姉様が扉を叩きながら私達のことを読んでいる。部屋の前では鶴と蒼も待ち構えているようだ。逃げ場はない。「蹴破るぞ！」と怒鳴り声が聞こえてくる。もうどうしようもない、と両手で顔を覆つて現実から目を逸らす。ドンドンと扉を叩く音が少しづつ強くなつて来ている。結論を云えば、葵の貞操は守られている。しかし、今ある部屋の惨状は、下手な行為よりも酷いことになつていた。本当に、もう、どうしようもない。「蒲公英！ 蹴破るぞ、良いな！」と声が上がる。「いいよ、やつちやおう！」と蒼の声も聞こえてくる。もうどうしようもないから葵の体を抱きしめて、その小さな胸に顔を押し付ける。これが最後になるかも知れない。だから目一杯に味わおう、と。

程なくして、扉が蹴破られる。さあ修羅場の幕開けだ。皆、包丁は持つたな？

第八話.

私、蒲公英は今、従姉妹達を前に正座させられている。

とりあえず風呂に入ることは許されたけど、その後すぐ身柄を引つ立たれた。床に正座させられる、従姉妹達が椅子に座つて私達を見下している。ちなみに葵は今もまだゆつたりと入浴中だ、この扱いの違ひである。何処で選択を間違えたのかな、って思つたりもしたけども、たぶん私は何も悪くない。というよりも私は何も悪いことをしていない気がする。悪いのは紛れもなく葵だし、しつかりと葵を繋ぎとめていた従姉妹達も悪い。そんなことを言つたところで従姉妹達が溜飲を下げるとは思えないから黙つてるけど。

きっと葵は西施とか王昭君とかの生まれ変わりだ、傾国の美女とは彼女の為にある言葉だと思つた。

この宗教裁判染みた状況下、それでも問答無用の断罪はなく、説明を要求されたので軽く経緯を説明する。

「——という訳なんだけど、翠姉様も鶲も蒼もさあ。もうちょっとどうにかならなかつたの？」

話し終えた時、状況はまるつきり変わつていた。

気不味そうに顔を俯ける馬鹿が三名。語り聞かせた内容は、従姉妹達の性欲が強過ぎて避けていた事に加えて、彼女は女性であり、男性的な嗜好を持つという点。ついでに従姉妹達には好意を向けていることも伝えれば、「ならどうして!?」と彼女達は問い合わせる。それは自分の胸に手を当てて考えてみると良いんじゃないかな、と。

そうした話が積み重なった結果、今の状況が生まれた。

「あれ、どうなつてるの、これ？」

そこでホクホク顔の葵が部屋に戻つてくる。長い黒髪が水を含み、滴らせる姿。ほんのりと赤みの帯びた頬が扇情的で、とか今は思つてゐる場合じやないので、とりあえず私の隣に座らせた。葵は顔を俯ける三人を暫く見つめた後、ポンと両手を合わせてみせる。

「ご飯にしましよう」

その抜けた発言に従姉妹達は揃いも揃つて、ぽかんと口を開いた。

らしいと云えばらしい発言に呆れつつも「恨み言の一つや二つでも言つとけば?」と促せば、うーん、と葵は頬に手を添えて悩みつつ、「恨むような事はされてませんし」と曖昧に笑つてみせる。そういう甘い態度を取つてゐるから従姉妹達に付け込まれて来たんじゃないかな。盛りのついた犬、もとい馬にはガツンと言つてやることも躊躇だと思うんだけど。

「迫られるることは嬉しいんだけど、毎日あれだと体力が持たないし……あと私を見る目が怖い」

葵は眉間に皺を寄せて、私は生餌じゃないですよ。と拗ねてみせる。

それだけでも効果はあったのか、より一層に気落ちさせた。優しくしてつて言つても無視するし、嫌つて本氣で言つても止めてくれないし、もうちょっと私の事を労つて欲しい。そんな追い討ちの数々に従姉妹達は三人揃つて土下座した。うん、反省して貰わないと困る。それから各々の謝罪を笑顔で受け取る葵を見つめて、やつぱり甘いなあつて溜息を零す。たぶん、葵を独占する事はできない。元より葵は従姉妹達に對して好意的だ。それは恋愛的な意味合いも込められてゐるし、きちんと順序を立てれば、十分に葵を籠絡させることもできたはずだ。それができなかつたおかげで私が葵と出会う事ができたのだから非難はしていても、感謝もしている。

……たぶん私は彼女を独占する事はできない。

葵も苦言こそ零してはいるが、本氣で怒つてゐる訳ではない。葵が従姉妹達と関係を断絶することは、今はまだ考えられず、少なくとも従姉妹達の内一人とは関係を持つことになるだろう。なんとなしに三人共に首つ丈であるから三人と関係を持ちそうな気がしなくともない。それでも焦りはなかつた。何故なら昨夜の時点で、既に私は葵との繋がりを得てゐる。そして、それは従姉妹達では決して得られないことのできないものであつた。何があつたのかは言うつもりはないけども。お腹をさすりながら優越感、これが本妻の余裕と云うものである。

それから程なくして食事の準備、何故か赤飯が出てきた。

「あれ、今日は何かお祝いでもありましたか？」

鶴が問う、葵は満面の笑みで領き返した。あれ、これ、なんだか拙い流れな気がする。

「今日はねー。私が卒業した記念の日なのです」

「卒業？　何を卒業したんだ？」

翠の素朴な疑問に、葵は自慢げに胸を張つて、ふつふーん、とドヤ顔を披露する。

「なんとですね、私は昨夜……！」

「おおつと、手が滑っちゃつた！」

「ふぎやつ!?」

そんな葵の後頭部を思い切り叩いた。

訳が分からぬ、と驚愕しながら私を見つめ返すけど、無視を決め込んで赤飯を頬張る。これは完全に葵が悪い、他人の秘め事を聞くのは良いが、話されるのは溜まつたものではない。そもそもだ、本人が居るところで情事を語るなんて纖細さに欠けている。そういうのは神経が図太いではなくて、抜けている。と云うものだ。出来るだけ平静を保ちながらバクバクと御飯を平らげて、御茶をズズツと啜る。こんな場所に居られるか、私は一人で部屋に戻らせて貰う！　こういう時の葵の口の軽さには半ば諦めているから、私が居ないところで勝手に盛り上がり上がつて欲しい。

その様子に違和感を抱いたのか、蒼が探るように私を見つめる。

「蒲公英、もしかしてー？」

蒼が右手の親指と人差し指で輪を作り、そこを左手の人差し指を通す。ボツと顔が赤くなるのが分かつた。

「え、そんな！　蒲公英様が葵の初めてを貰っちゃつたんですか⁈」

鶴がガタツと席を立つ。それまで不思議そうに私達を見つめていた翠が「蒲公英、それは流石に許されないぞ！」と怒声を張り上げた。まるで戦場で敵将と出くわした時のようにビリビリとした圧を放たれる。違う、違うけど間違つてもいい。弁明するには、余りにも羞恥的であつた為に私は口籠ることしかできない。

「はい、蒲公英が私を筆下ろしてくれました」

そして、そういうことを笑顔であつさりと言つちゃうのが葵だった。

「えつ？」と口を開ける翠。

「あつ……」と何かを察する鶴。

「ふうん」とにんまり笑みを浮かべる蒼。

三者三様の反応に私は無言で席を立ち、食器も片付けずに部屋を立ち去ろうとした。

「ちょっと待て、蒲公英！ それはどういうことだ!?」

「えつ、蒲公英様？ それってどうするんですか!? もしうきちやつたりしたら……！」

「そろいえば葵つて元男つていう話しだつたつねー」

私は脱兎の如く逃げ出した。あ、駄目、体を動かすと垂れてくる。何がとは言わないけど、この状態で外に出る勇気はない。とりあえず私室にて籠城戦だ。部屋に入つて鍵を閉めて……あつ、扉は蹴破られたままだつた。「蒲公英、話を聞かせて貰うぞー」と追いかけてきたのは翠だけだ。鶴と蒼の二人は来ていない。じりじりと部屋の中まで翠に詰め寄られる中、どうして一人が来ていないのか思考を巡らせる。そして、蹴破られた扉の先から、ひたひたと葵が感情のない笑顔で姿を表したのを見て、全てを察し、勝利を確信する。

「御姉様、御飯はきちんと食べて来たの？」

「いや、まだ食べきつてはいないが？」

「うん、そうだね。食事中に席を立つのは行儀が悪いね？」

すぐ後ろまで迫る葵にポンと肩を叩かれる翠、煩わしそうに後ろに振り返り、無感情の笑顔を浮かべる葵と目が合つた。翠は一度、私に視線を戻す。とりあえず頷き返した。そして、もう一度、葵の方へと振り返る。

「御飯を中断してまですることかな？」

「……イイエ、チガイマス」

葵に首根っこを掴まれながら、とぼとぼと退出する翠に胸を撫で下ろした。

「葵、ごちそーさま！ 今日も美味しかったよ！」

「いつもありがとうございます、御馳走様でした」

そして擦れ違つて入れ替わるように、部屋へと入つてくる鶴と蒼の二人。逃走経路は何処にあるか、と探りを入れるも二人の息の合つた連携に僅かに残された逃げ道も塞がれる。

「き、昨日、何があつたのか教えて貰います！」

「早く吐いた方が身の為だよ～？」

意気込む鶴に、両手の指を脇傍と厭らしく動かす蒼を前に私は壁を背に負け惜しみを叫んだ。

そんなのに絶対に屈しないんだからね！　なお。

†

その日、家族会議が行われた。

いつも家族みんなで仲良く食事を摂る大広間には重苦しい空気が充満している。

席に座るのは義姉妹達に加えて、蒲公英。三姉妹の視線は蒲公英に注がれており、その表情は三者三様だ。御立腹といった様子で腕を組むのは翠であり、複雑そうに眉間に皺を寄せるのは鶴。そして楽しげに蒲公英の事を見つめるのは蒼だった。蒲公英はまるで公開処刑を待つ罪人のように肩身を狭くしている。そして、そんな家族達を前に私、葵は溜息を零した。

最近、家族の関係がギスギスしてゐるせいか楽しくない。

今から行われるのも私と蒲公英の情事関係、それをこうやつて尋問して暴くのはちよつと無粋が過ぎると私は思うのだ。女三人寄れば姦しいという言葉通りにガールズトークをするノリで聞き出せば良いのに、翠は大袈裟なのだ。これならまだ興味ないふりをしながら聞き耳だけは立派な鶴の方が好感が持てるというものだ。むつつりさんの存在は、それはそれで弄り甲斐があり、可愛らしいものである。兎に角、この場で話すことは何もない。

「翠、これ以上、空気を悪くするなら私、口聞かないからね」

鶴は揶揄い、蒼には後でキヤツキヤウフフと教えてあげる。

絶望顔を浮かべる翠に、ふんだ、と顔を背けて席を立つた。

「……あれ、これって私が悪いのか？」

「御姉様、どんな理不尽な事情があつても、こういう時は旦那様が悪くなるんだよ？」

「実家があつたら、家に帰らせて貰います。つて言われているところだつたね！」

そもそもだ、義姉妹達はみんな好き勝手が過ぎる。

欲望に忠実なのは良いが、もうちょっと、こう、遠慮や思いやりが欲しい。

求められるのは嬉しいけども限度はある。

その後、義姉妹達と蒲公英で話し合いが行われたようだが、その内容を私は知らない。

涼州軍と言つても常備している軍勢の数はいうほど多くはない。

軍の中核を正規兵で構成して、残りを民衆から数合わせで徴兵すると云うのが今ある戦争の形だ。尤も数合わせといつても実際に兵を集めるのは豪族や名家といった者達であり、今の賊多き御時世では義勇軍も存在している為、下手な正規軍よりも徴兵された兵達の方が強いということが稀に起る。特に異民族と接していない中央の正規軍には多い話だつた。そんな腑抜けた正規軍が多い中、涼州軍は極めて精強だ。総数三千の騎馬隊は大陸屈指と云つても良く、略奪を行うだけで占領するつもりのない異民族を追い払うには涼州騎馬隊だけでも十分に事足りる。

そして、この精銳を創立当初から運用しているのが涼州の三傑が一人、馬騰だ。

戦場における馬騰は質実剛健の将だ。家庭においては、ちと生活力や配慮に欠ける面もあるようだが、将としては非の打ち所がない。当代の官軍では随一の将として名高い皇甫嵩と比べても決して見劣りすることないと私は思っている。

そんな彼女のことを初めて、見たのは匈奴族との戦の時だ。

あの時はまだ涼州の三傑と呼ばれる董卓と賈駆もあり、迫る匈奴族の騎馬隊を丁寧に受け止めていたのを覚えている。良く云えば、纖細で事細やか、悪く云えば、神経質で細か過ぎる。そのような指揮を成立させるには軍全体を精銳化させなくてはならなかつたのだが、前述したように軍というのは基本的に徵兵された兵で成り立つている。その上で連携のことまで考へるのであれば、逆に分断されて各個撃破されてしまつたり、そもそも上手く連携できず、一丸になつて突撃してきた敵軍に圧倒されることも珍しくなかつた。それならば、下手なことをせずに最初から正面衝突をさせておいた方が被害が少ない場合もある。實際、それが基本的な戦い方だ。方に近い戦争では、出来

るだけ簡略化させることが基本になる。だから、将が先陣切つて突撃するのだ。「何も考えずに俺について来い！」というのは最も単純で分かりやすく、それでいて臨機応変に素早く軍を動かせる手段である為だ。つまりところ万を超える匈奴軍を相手にした戦争で「超絶技巧ではあるが、これができたら被害は最小限で勝てる」という理想を追求した作戦を実行したのが当時の涼州軍だつた。そして、その浪漫の塊とも呼べる戦術を成立させたのが馬騰という女である。

ある程度、腕に覚えのある将の例外に漏れず、馬騰もまた部隊の先頭に立つて敵軍に突撃する将であつた。しかし馬騰が優れていた点は戦場に居ながら戦場全体を俯瞰できる将であつた点だ。無論、まるで大きな蛇のように騎馬隊を動かして戦場を駆け巡る用兵術も常識から逸脱していると云える。だが素晴らしいのは的確に相手の急所を穿ち、味方の危機にはいち早く駆け付けて救援する事だ。それは直感だとか、嗅覚だとか、そういう感覚的な話ではない。周囲の両軍の動きと本陣から飛ばされる賈駆の指揮だけで、全軍の状況を頭の中に思い描くことができた。その為、彼女は本陣から指揮が飛ぶ前に動くことができ、必然、本陣からの指揮も彼女を援護する形で動かすことになる。馬騰の存在があればこそ涼州軍は無謀とも呼べる理想的な戦術を取り、被害も少なく常勝無敗の戦績を築き上げてきたのだ。

この非常識な連携を前に匈奴族は敗退し、涼州の三傑に恐れを抱くことになる。

匈奴族が軍勢を立て直している間、小競り合いはあつても涼州は平和だつた。

涼州軍の対匈奴戦における大勝は他民族に伝わっていたようであり、涼州の三傑に恐れて手出しを控えていたのだ。

しかし、涼州が平和で困るのは異民族ではなく、漢王朝であつた。少し話を変える。

漢陽郡隴県の城都、その政府。

此処は涼州全体を司る政治の中核になつており、涼州刺史の耿鄙もまた此処で政務を行なつてゐる。

さて、この耿鄙という人物。端的に云つてしまえば、無能であつた。

耿家と云えば、それなりに有名な一族ではあるが、都から派遣された彼女は世間知らずも良いところの箱入り娘だつたのだ。政治の「せ」の字も分からぬ愚か者であり、軍務は馬騰に一任し、政務の大半は部下に押し付けて、自分は渡された書類を読みもせず、判子を押すだけの仕事に励んでいた。唯一の美点は、彼女本人が自らの無能を自覚していた事だ。評定を開いた際には、開催の挨拶をした後はほとんど何も喋らず、良きに計らえ、と最後に偉そうに告げるだけだ。それでいて少なくない金額の贅沢をするものだから配下としては溜まつたものではなかつた。

それでも彼女が涼州出身で親の七光りという話であつたなら周りで支えてやろうという気も出たかも知れない。しかし残念ながら彼女は洛陽から派遣された人物だ。尤も州刺史に就く人間は余所者と慣例で決まつてゐるが、それでも納得できないものは仕方ない。そもそも、涼州は漢王朝に使い潰されている。最西端に突出する形で治められた涼州という土地は山岳地帯に囲まれてゐる為、農業には向かない土地であつた。その為、他州と比べて開発できる土地が少ない。つまり金もなければ、物もない。州の運営は常に火の車で、周辺に棲息する異民族の相手もしなくてはいけないのだからやつてられない。異民族に対抗する為、常備兵は多く確保しておかなくてはならず、人すらも足りていないのでから経済が痩せ細るのは致し方ない話であつた。それこそ中央の支援を受けなくては壁としての役割すらも果たせない程にだ。

嘗て、涼州には董卓という英傑が居た。

これはよく勘違いされていることなのだが、彼女が真に凄いのは、涼州軍を率いて何万と超える異民族を返り討ちにした武勇ではない。彼女は異民族と友好関係を結ぶと千を超える家畜を受け取り、それで得た労働力を余すことなく使い切る為に借金に次ぐ借金をして、涼州の借金王の名を欲しいままにした後で、莊園運営を見事に黒字転換させて、見事に全ての借金を返済しきつた決断力と行動力にある。

その董卓が残した莊園は今でも涼州の命綱になつてゐる。

董卓の活躍は漢王朝にとつて目障りなものであつた。

涼州は漢王朝から離れた土地にあるせいか、その文化形式は漢民族と呼ぶには似て異なるものだ。実際、民草も漢王朝の一員としての自覚はあつても、司隸に住む人間と自分達が同じ人種であるという自覚を持つている者は少ない。それはつまりところ、なんとなしに漢王朝の決定に従っているが、心から忠誠を誓っている民草は少ないとことだ。生まれた時からそう決まつていたから従つていてるだけに過ぎない。それだけの話である。

私自身、涼州が漢王朝の庇護下にあるとは考えていない。むしろ守つてやつてている立場だと思つてはいるし、漢王朝も心から涼州のことを利用している訳ではない。危険視されているからこそ、董卓といった英傑を涼州から奪い取り、必要以上に力を付けないように手を尽くす。そして適度に異民族と戦つて疲弊して貰わなければならなかつた。叛乱の芽を潰す為に、叛逆の華を咲かせないように、涼州の地を枯らし続けるのが漢王朝の方針であつた。ああ、そうだ。確かに涼州は漢王朝から援助を受けてはいる。だが決して涼州は無償で支援を受けてはいる訳ではない。異民族の侵略から司隸の安全を守る対価としてもらつてはいるに過ぎない。二束三文の資金と物資を得る為に涼州の民草は今日も今日とて血を流して戦い続けている。それは決して対等とは思えない、涼州は使い潰されている。生かして殺さず、最低限度、涼州を維持し、異民族を打ち破れるだけの力を残す。

涼州の民草の価値は、司隸で生きる者達よりも低かつた。
もう良いだろう、充分だ。私達は充分に漢王朝の為に尽くしてきたはずだ。

元より涼州は涼州の人間で治めるべきだつたのだ。涼州の誇りを、価値を、その存在を守る為、今こそ涼州は立ち上がらなくてはならない。決して涼州を漢王朝の食い物にしてはならない。

だから私、韓遂。やん陽は剣を取る。全ては涼州の為に。

第一話.

嘗て、董卓は涼州の借金王だった。

友誼を結んでいた羌族から贈られてた獸畜千頭は当時、豪農を自称する董卓の財政を圧迫した。というよりも一月もせずに破綻する計算を弾き出した。その為、董卓は自らが生き延びる為に東奔西走と駆け巡り、あの手この手と形振り構わずに借金をしては農業や牧畜に必要な機材と人手を片つ端から買い漁つたのだ。それでも一年や二年で千頭の獸畜を活用しきることは難しく、かといって活用し切らなければ、畜獣の餌代だけでも借金が無制限に膨らみ続ける。何もしなければ破産する以外に道がなかつたから形振り構わずに開発を進めて、資金が足りなくなれば、何処かしらから追加の借金をして更なる開拓を続けてきた。最初は余裕を見せていた金貸しも、気付けば董卓に貸し付けた金額が青天井となつており、董卓に破産されると借金が回収できず、周囲の豪族や名家を次々に巻き込んでは董卓に金を貸し付けていった。結果的に涼州における多くの豪族、名家が董卓に金を貸し付ける事態に発展し、董卓の開発事業は多くの御家を巻き込んだ一大計画にまで発展していた。何処かで蹠いては一気に財政は破綻する。というか常に財政は破綻しており、借金を繰り返すことで誤魔化しているだけに過ぎない。収益が伸びた分だけ借金が膨らみ続ける。立ち止まつた分だけ、億単位で借金が膨らんでいくものだからと、文字通り、死に物狂いで開発を続けてきた結果、董卓は涼州における一番の豪農という立場にまで駆け上がつたのだ。

この時の経験から董卓は借金に対する忌避感が失われていた、借金ができる内は破産しないということを学んでしまつた。資金が余つて使い道に困つてゐる豪農や商家からは積極的に借用を進言し、なにか新しいことをやつてみたい。もしくは資金難故に燻つてゐる者に対して、積極的に資金を貸し与えるようになる。収益という点でいえば、これはあまり儲けにはなつていなかつた。どちらかといえば赤字になることが多い。この事に関して当人は「稼ぐだけなら莊園運営だけで十分ですよ。それにもう収益を伸ばす為に借金をしている

のか、更なる借金をする為に借金をしているのか分からなくなる事態は勘弁してください」と真顔で答えており、結果的に全体で赤字になつていなければ問題ないとも言つていた。でも、本人は知つているのだろうか、確かに赤字は減つたけども借用書の紙束が日に日に増え続けていることに。執務室に入る度、董卓の目から光が失われて、乾いた笑みを浮かべていた。時には借金の肩代わりに従業員も含めて施設を徴収し、董卓自身が指揮を執つて財政を立て直し、借金の取り立てを終えてから改めて手放すこともある程だ。董卓が云うには、「死に物狂いでやれば、世の中の九割程度はなんとかなります」とのことだ。目が死んでた。董卓が融資する条件の一つには、死に物狂いになれる才能というのがある。そういう人間には董卓自身が手を貸すのだと。破産から財政を立て直し、借金の返済を終える頃には、みんな目が死んでる。

この積極的な資金運用は、涼州の開発を大きく前進させた。同時に董卓が持つ涼州の影響力を爆発的に増幅させることになる。というよりも涼州刺史ですらも董卓の意向を無視できない程になつており、涼州の方針には董卓の意向が強く反映されるようになつてしまつた。実際、財政面で涼州に最も貢献しているのが董卓であり、涼州軍の糧食の半分近くが董卓の莊園から出されている為、州刺史を始めとした官僚達は董卓に頭が上がらないというのが現状だ。その影響力は董卓が涼州を離れてからも残つており、并州に居る今となつては涼州と并州の橋渡し的な存在にもなつていた。

董卓が居た時に比べると涼州の開拓速度は衰えたが、それでも董卓が残したものは大きい。

今の涼州があるのは、董卓のおかげと言つても過言ではない。
此処は涼州隣西郡にある董卓の莊園。

見渡す限りの田畠が広がつており、途中には幾つかの小屋が置かれている。少し離れた場所には田畠を管理する奴婢達の集落があり、そこは下手な村よりも豊かで発展してたりする。莊園の取引に來たついでに集落に寄る商人も多いし、武器以外は特に制限を設けていないし、生活費他諸々を差し引いた給金を支払つてたりするからね。

偶に集落に足を運ぶと知らない間に店が増えていたり、家屋が増えていたりする。常在してくれる鍛冶屋が来てからは農具の手入れも随分、楽になった。これも全て、御姉様が築いた基盤あつての話だ。私はただ引き継いだだけに過ぎない。

私の名は牛輔、真名は夜見。

偉大なる御姉様、月の親戚になる。

董草

私は御茶を飲むのが好きだった。

地平線の先まで届きそうな田畠に植えられた蕎麦や米、野菜、果物が成長していく様子を眺めながら啜る茶は格別だ。春は少し涼しげな衣服を着込んで、夏には麦藁帽子を被る。秋には肌着を着込み、冬は流石に寒いから屋敷に籠る。時折、外で食事を摂つたりもする。それから御姉様が抱えていた物書きから小説や隨筆、時には脚本を読み耽り、ほんのりのほほんとした毎日を送る。

私には御姉様のような行動力はなかつた。御姉様みたいに誰にも彼にも融資しようとは思わないし、豪族や商家に資金が余つていようとも借用を申し出ない。そもそも私は御姉様が残した借用書の処理だけで手一杯で、資金を集めたところで御姉様みたいにポンポンと使い道が思い付く訳でもなかつた。その結果、ただ業務を終えてるだけでも貯金が貯まり続けて、気付いた時には畳然とする程の量の金銭が倉庫に溢れ返つていた。御姉様がいた時には、ほとんど空だつたのにこの有様である。「どれだけ資金を消費し続けてきたのですか?」と突つ込みたくなる。きっと御姉様なら「お金があるなら使わなきや、使わなきや破産します。借錢しても稼がなきや……」とか死んだ目で呟いている気がする。お金はあつても困るものじやない。と云うけども、限度が過ぎると持て余して使い道に困る。

最近は奴婢に子供達が増えていたるだから教育に力を入れ始めてみようかな、とかそんな感じだ。

金持ちの道楽つて、こんな感じで始まるんですねえ。と何処か遠くを眺める。

「金があつて困るとは羨ましい限りだよ」

私の向かい側に座る女性が鼻で笑つてみせた。癖つ毛の強い金色の髪は背中を覆い隠すほどに長く、揺れる程度には大きな胸元。そし

て勝気の強そうな目元、彼女は湯呑みに注がれた茶を啜り、「良い葉を使っている」とうつとりと目を細めて微笑んだ。

「満足してくれたかな？」

そう問い合わせれば、ああ。と彼女は頷き返す。見た目の年齢は皇甫嵩や馬騰と大差なく、体格も二人と比べて見劣りしない。小柄な私や御姉様と比べると頭一つ分、大きな感じだ。彼女の返事に、良かつた。と満足して微笑み返す。

彼女の名は韓遂、字は文約。涼州では有名な任侠の一人だ。馬騰が統治者の立場から民草を守る存在とするならば、彼女は民草の中から圧政や賊徒から民草を守る義賊とも呼ぶべき人物であつた。無論、やつていることは犯罪に違いないが、それでも官僚の手が届かない無法地帯で着実に支持を得ている人物もある。韓遂の影響力は僻地においては董卓や馬騰よりも強く、涼州の統治に大きく貢献していた。そんな彼女が私のところに来るのは一度や二度ではない。知己と呼べる程度には見知った仲ではある。

そういうえば、と彼女は世間話を始めるように口を開いた。

「今、世間では黄巾党と呼ばれる賊共が暴れているようだ」

その情報は既に得ており、そうだね。と返した。

馬騰にも相談してみたことがあるけども、涼州は中央ほど黄巾党の影響を受けておらず、万が一があつたとしても優先的に兵を回してくれる約束してくれた。馬騰がそう言つてくれるのであれば安心できる、と今日も呑気に茶を啜つている。実際、私には軍事がよく分からぬ。だから素人が口出しするのは控えた方が良い。私は無能に違ひないけども、御姉様の足を引つ張る無能にはなりたくなかった。しかし、それはいけない。と韓遂が口にする。

「今の御時世、ある程度は自衛する手段を身に付けておくべきだ」

その言葉に「馬騰は守つてくれると約束してくれているから丈夫夫」と返せば、彼女は首を横に降る。

「馬騰なら確かに手が届く範囲で助けてくれるだろうが、黄巾党の被害が涼州全土に及んだ時、もしくは異民族の襲撃があつた時、馬騰の手がこの莊園まで届かなくなる可能性が出てくる。そうなつてから

では遅い」

強い口調、私を見つめる青色の瞳。そこには私を慮る気持ちが混じっていることが見て取れた。茶を啜る、間を取る。彼女のいうことは一理ある。私は御姉様から荘園を任せられた身だ。万が一にも失う訳にはいかなかつた。同時に私は自らの無能を知つてゐる。こういう大きな決断をする時、私は誰かに相談することに決めていた。

「もし仮に私兵を持つことになつても指導できる人間に心当たりがないしね」

「それこそ心配ない、募集すれば涼州中から人材が集まるよ」

「とりあえず、今はまだ決め兼ねるかな」

茶を啜ろうとして、中身が入つていなることに気付いた。仕方なく

使用人の一人に茶のおかわりを要求する。

「……まあ無理強いはしない。ただ頼る先に私が居ることも忘れないで欲しい」

そう告げる韓遂の瞳は、やはり友人を慮るものだった。

御姉様が漢王朝から疎まれてゐることは知つてゐる。そして私は董卓の親戚で荘園を受け継いだ人間だ。確かに漢王朝が私を見放す可能性は少なくないだろう。だが馬騰が私を見捨てる可能性もまた限りなく低い。……もし仮に馬騰が遠征などで近くに居ない時、誰が私と荘園を助けてくれるのだろうか。きっと呼び掛ければ、助けてくれる者が少なからず存在するだろうが、それが戦となれば尻込みする者も多いに違ひない。心が揺れている。中身の入つていな茶を啜る。

「とりあえず、行動を起こすにしても馬騰に相談した方が良いだろうか。」

韓遂と別れた後、椅子に座つて、机を引き寄せる。

書籍を幾つか積み重ねて、その上に胸を置いて、ふうつと溜息を零した。資金と一緒に越したことはないのだろうが、大き過ぎるのも考えものだ。肩が凝ることが多い私は、はしたないとわかつてながらも、こうやつて無駄に大きな胸を置いていることが多い。特に読書を嗜んでいる時は、ずっとこんな感じだ。

使用人達からの視線も、もう慣れたものである。

第二話.

董卓の莊園、それは涼州で最も生産力の高い拠点のことを云う。

涼州軍を維持するのに必要な糧食の半分近くを肩代わりしてくれており、此處を落とされる。もしくは荒らされることは、そのまま涼州軍の生命線を断たれることに繋がりかねない。その為、董卓の莊園は涼州における重要拠点の一つに定められており、異民族に対する防衛計画には必ず董卓の莊園が組み込まれていた。

そんな重要な拠点であるにも関わらず、月は自身の莊園を守る為の私兵を持たなかつた。これは涼州軍に対する信頼であり、漢王朝に刃向かう気はないという意思表示、ついでに云えば、膨大な軍事費を涼州軍に肩代わりさせているとも云えた。董卓月自身が語るには「お互いに慣れない分野で仕事を滞らせるよりも、お互いの得意分野で綺麗に分業すれば、皆で幸せになれます」という話ではあるが、彼女が考えることはもつと単純なはずで「これ以上、余計な仕事を背負わせないでください。お願ひします」というのが本心かと思われる。その為、月は今まで非武装を貫いており、「翡翠が軍事の最高責任者である内は、このままで構いませんよ」と軍閥化を拒絶し続けてきた。

しかし、そんな彼女の莊園にも転機が訪れる。

「寿成様、ようこそいらっしゃいました」

そうにつっこりと微笑む月と同じ薄水色の髪をした少女。

雰囲気も何処となく月と似通つており、前髪を下ろしている事と胸が大き過ぎる点を除けば、ほとんど同じ姿形をしていた。彼女の名は牛輔、月の親戚筋に当たる人物のようだが、容姿だけだと姉妹や双子と言われても信じてしまいそうだ。胸以外、いや、あの小さな体で、私もや蒼よりも大きいってどうなつてているんだ。巨乳少女、幼女巨乳、いけない。とても駄目な感じの響きがする。普段は抜けた雰囲気を持つ月が、もつと抜けて呑気になつた感じなのが牛輔という人物であった。そんなおつとりとした空気を纏う彼女は、月の代行で莊園を任せている涼州の重要人物の一人だ。

今回、莊園に訪れたのは糧食の運搬の為、その指揮に私が出向いた

のは彼女、牛輔に呼び出されて事だつた。

「ささつ、中へお入りください」

牛輔の案内で月の、今は彼女の屋敷に足を踏み入れる。

彼女の要件は言葉にすると簡単なものだ。とある知己に私兵を持つ事を薦められた、この事に対して寿成様の意見を聞きたい。たつたそれだけの話であつたが、しかし、これは今まで非武装を信条にしてきた董卓の莊園にとつて大きな転換点になる。実際に会つて牛輔の様子を見てみたが、何時もと変わらず緊張感がなかつた。どうやら牛輔は軽い気持ちで相談を持ち込んだようだが、それは大きな間違いだ。涼州の豪農で最も力を持つ董卓の莊園が私兵を持つ、これは彼女の莊園だけの問題に留まらず、涼州全体に影響を与える程の大事であつた。

いや、行動を起こす前に相談してくれて本当に良かつた。最悪、涼州の防衛計画を最初から引き直す必要があつた程だ。

通された客間、用意された椅子に腰を据える。

此処は月が使つていた頃からほとんど変化がない。それは拘りや思い入れがあつての事ではなく、ただ単に牛輔が部屋の模様替えを面倒臭がつた為だ。絵画や壺、大皿といったものは牛輔の趣味ではなかつた。その為、高価な宝物を売り付けようとした商家は何の成果も得られないまま、屋敷を出ることが多い。かといって蒐集癖を持つていい訳ではない。彼女は小説や隨筆が大好きで、そういうつた書物を見ると、特に興味のない内容であつても買つてしまふ悪癖があつた。それで積んでしまつた書籍も多く、屋敷に多くある空き部屋の一つが彼女の書物庫になつていていたりする。ついでに云えば、月が屋敷に居た頃は必要最低限の数しか居なかつた使用人が、牛輔に代わつて劇的に増えた。使用人が御茶と茶請けを持って来る。「良い茶葉が入つたんですよ」と牛輔は待ちきれない様子で椅子に座つたまま両足をパタパタと動かした。

月は自分の事は自分でやりたがる性格であつたが、牛輔は逆に他人に任せられる事は他人に任せたがる。

月が淹れてくれた時よりも美味しいけど、なんとなしに味気ない。

そんなことを言うと両者に對して失礼だとは思うのだが、あの妙な苦味というか、雑味というか、そういう慣れ親しんだものが感じられないのは少し物足りなく思える。ズズッと啜つた後で「良い茶葉を使っているな」と問いかけると「ええ、冀州で採れた物のようですね」と牛輔が答える。茶請けが美味しいと言えば、何処で買つたのか教えてくれる。事のついでに「莊園の運営はどうだ?」と問うと「冷害の影響で生産量が落ちていますね」と特に困った様子もなく答えてくれた。まだ大事ではないのか、それともただ単に興味がないだけだろうか。他にも月からの手紙、近頃の交友関係などを、それとなく世間話を交えながら問い合わせした。自分を信用してくれている相手を問い合わせるのも気後れするが、月から牛輔のことを頼まれているので慎重に情報を収集する。

そしてまあ何時も通りだと確認したところで本題に移る。

「私兵の話だが、持つのは良いが軍閥化するのはやめた方が良い」

「ん~、やつぱりいらない?」

「万が一の備えが欲しいのであれば、別に私兵を新たに募る必要はない」

軍閥化することは月にとつて都合の良い話ではないと私は考える。この莊園は涼州軍の維持負担を担う代わりに徵兵を免除される為、他の豪族が戦場に駆り出されている中でも董卓の莊園は人々を開拓を続けることができた。ついでにいうと、この莊園は涼州の重要拠点である為、何かが起きた時、軍事力を持たない莊園を守る為に涼州軍を派遣する手はずになつていて。こうしておけば緊急時に私が足を運ぶことができるかも知れないし、私でなくとも娘達を送ることはできる。そういう状況を作つておくことに意味があつた。

であれば、表向きには軍事力を持つていなことを主張しながら自衛手段を確保する手段を提示すれば良い。

「今居る奴婢達から志願者を募り、余つた時間で武芸を教えれば良い」「えーでも、うちつて……いや、んー、奴婢の中に武芸の心得を持つてる者つて居るのかな?」

「心配なら師範役だけ募れば良いんじゃないかな?」

今でも英雄視される月の莊園ともあれば、誰かしら名のある者が名乗りあげるはずだ。

「うーん、まあ……特に拘りがある訳でもないし、それでいいかなー」
考えるのが面倒臭くなつたのか、牛輔はふにやりと机に突つ伏しる。

「そういうえば、その私兵つてのは誰の入れ知恵なんだ？」
「韓遂だけど？」

その名に私は少し警戒心を高めた。

「チイツ、次から次へと……つ！」

長剣を片手に騎馬を駆けさせる。

視界の先には火の手が上がる集落があり、異民族の騎馬に追い回されている。ある者は惨殺され、ある者は衣服を剥がされて、ある者は脇に抱えられて、直視し難い惨劇を前に——まだ助けられる者が居る、と更に馬を疾く駆けさせた。そんな私の背を追いかけてくれるのは五十程度の騎馬兵であり、誰もが義憤に心身を漲らせて突貫する。これは西涼の地においては特に珍しもない光景だ、誠に遺憾な事ながら。

河西四郡。武威郡に加えて、それより西にある酒泉郡、張掖郡、敦煌郡の四つの郡を示す言葉だ。

大陸部から突出する形で占有された領土は防衛という観点から見ると守りに難く、都から離れている為に治めることも難しいという困難な土地ではあつたが、それを補つて余りある経済的な効果を期待できる道でもあつた。此処は遙か遠く、西の果てから来たという異国の商隊が使う街道を内包しており、その交易によつて得られる利益は莫大なものだつた。それは漢王朝の財政を大きく支えており、この西の最果てまで続く交易路——異国の者はオアシスロードと呼んでいた——を維持する為に、涼州という領土が存在していると云つても過言ではない。

董卓が友誼を結んでいる羌族もまた、この街道沿いに存在する部落であり、商隊と取引する事はあつても襲うこととはしなかつた。ただ収

穫期が近付くと異民族が集落を襲つては食料を略奪する為、なかなか人が定住せず、他郡と比べると開発が遅れており、官軍もまた街道の守護を最優先としていることもあつて漢王朝に対する忠誠心は薄かつた。

特に河西四郡の更に北にある張掖居延属国においては、異民族に対する備えとして以上の働きを期待されて居なかつた。

此処では頻繁に異民族による略奪が発生する。

張掖居延属国には居延県の他に城都は存在していないが、城都があるということは、それを支える為の集落が各地に点在している。しかし城都には必要最低限の兵力しか置かれておらず、また遊牧騎馬民族である鮮卑族の機動力もあって満足に防衛しきれていなかつた。韓遂の現状を目の当たりにした私、陽は私財を投げ打つて有志を募り、義勇軍を編成する。また、こういつた事態は西涼の何処でも行われている為、張掖郡を中心に異民族を打ち払いながら巡回して回つていた。すると、こういう場面に出くわす事は稀によくある。

特に董卓が涼州を離れてからは頻繁に略奪しに来るようになつており、兵力の差から涙を飲んで見逃すことも少なからずあつた。高々、百程度の義勇軍にできることなんて限られている。それでも目の前で行われている非道を少しでも討つ為に、そして目の前で行われる悲劇から少しでも多くの人を救う為に日夜戦い続けた。

これが根本的な解決にならないと知りながらも、戦うしかなかつた。

「貴様等、よくも我らの土地でッ！」

長剣を振り回しては問答無用で両断する。

逃げる者から徹底的に、脇に女子供を抱えている俗物を優先し、その次に食料といった物資を持つ者を追いかけて殺した。命乞いも聞き入れず、慈悲すらなく、同じ空氣を吸つてることすら不快だと殺戮する。初めて殺したのは何時の日か、特に感慨はなかつた。達成感もなく、優越感もない。やるべきことをした、ただそれだけだつた。大義や正義は持ち合わせておらず、義憤のみを以て民草を害する異民族を淘汰する。

殺した数が十を超えた頃、集落から敵は居なくなっていた。

ふうつと息を吐いた。やはり達成感はない、ひとつ作業を終えただけだ。後ろを振り返ると残された民草は皆、力なく頭垂れている。既に手遅れになつた者も多い。衣服を千切られた少女は壁を背に身を丸くしており、その家屋には母と思しき女性が裸で数人の男に押し倒されていた。翻られていた。家屋に突入した時には死んでおり、事切れた母の代わりに子が男達の相手をしていた。いくら殺しても殺しきれない、どれだけ守ろうとしても守りきれない。こんな事が果たして何時まで続くのだろうか。

無力感に苛まれる。やはり義勇軍では、この地を守るには不十分過ぎた。

西涼を、いや、涼州を守る為には、もつと大きな力がいる。

漢王朝に仕官する事も考えた。しかし涼州には既に素晴らしい将が二人も居るのだ。当代における最高峰の将と名高い皇甫嵩。そして涼州の三傑が一人、馬騰。ついでに云えば、同じ三傑の董卓や賈駆も居た。しかし、私よりも優れた才覚を持つ四人を以てしても涼州を救うには至らない。漢王朝は涼州を単なる道としか考えておらず、生かさず殺さず、決して力を蓄えさせずに使い潰そうとしている。これまででは保たない、ではない。こんなことが延々と繰り返される、それを漢王朝は望んでいる。

最早、漢王朝の内側から涼州を救うことは叶わない。

なら、もう、取れる手段は限られている。

振り返れば半壊した集落、仲間達が救助をしてくれているがもう、此処が復興する望みは薄い。悔しさに口の端を噛み切つた。今はまだ耐える時、耐え忍ぶ時だ。結構には入念な準備が必要であり、時を待つ必要がある。今はまだ力を蓄える時だ。しかし、力を蓄えるといつても、この状況下ではどれだけ蓄えられるというのか。いや、それ以前に、どれだけ保つというのか。分からぬ。分からぬ、が、耐えるしかない。今は耐えるしかない。その時が来るかどうかかも分からぬまま、時が来た時には手遅れになつていようとも。耐えるしかない。

時は来る。と自分に言い聞かせた分だけ、見捨てるものが積み重なる。

†

涼州漢陽郡隴県の城都、その政庁。

涼州刺史の耿鄙は、謁見の間にて行われる評定に顔を出していた。とはいへ配下達が話し合う言葉のほとんどが理解できず、また予備知識も足りていないので本当に顔を出すだけだ。評定中にうつらうつらと船を漕ぎ始めるのもいつもの事で、その事を咎める者は此処には誰も居なかつた。

そんな中、とある配下からの発言が皆の注目を集めること。

「資源の無駄な出費があります」

そんなものは何処にもない。というのが良識的な文官の反応になる。

實際、涼州は他州と比べて生産能力は低い。これは西の最果てに通じると云われる街道を維持する為、歪に突出した形で領土を占有しているというのが一つ、もう一つは涼州は山岳地帯に囲まれており、農業の生産拠点として向いていない為だ。

ちなみに良識に欠けている文官は一様に目を逸らしている。理由は単純明快、彼らは横領している為だ。

しかし、良識派を氣取る文官の続く発言で彼らは、ほつと胸を撫で下ろすことになる。

「董卓の莊園から羌族に物資が流れています」

「それは知ってるわよ。馬騰が言っていたわ、なんでも外交と交易の為だとか？」

耿鄙が口を挟むと「ええ、そうでしょう」と文官は領き返す。

「しかし馬騰は根っからの武人であることを忘れてはなりません」

この文官の発言に良識のない者達は「あつこれ、なんかやらかすな」と察したが、しかし下手に手出しをして、標的を自分に変えられたくないでの押し黙る。涼州において馬騰と董卓、賈駆には手を出さない。これは暗黙の了解であつた。ちなみにその馬騰は賊の討伐に向いており、この場にはいない。

「この交易はほとんど利益が上がっていないのです。軍を動かして、羌族に物を売りつけて、得られる利益はほとんどない。冷害による被害は増え続ける一方、これから必要になるのは資金ではなく物資である。金はあつても物がない、そんな時代がすぐそこまで迫っているのです」

武人である馬騰にはこのことがわからない。と続けられた言葉に良識ある文官達は一様に領き返し、良識なき文官達は頭を抱えたくない思いを必死に堪えた。横領するにしても、汚職をするにしても、重要なのは根回しであり、根回しとは即ち人脈のことだ。利益を上げる為には損をしなくてはならない事もあり、良き関係というものは互いにとつて利益のある関係の事だ。外交利益つて金銭だけで測るものじやないんだよ？　と優しく諭したかったが、それで目を付けられては溜まつたものじやないので良識なき大人達は皆、黙り込んだ。せめて一欠片の良識もあれば、ここで諫言の一つもしただろうが、残念ながら彼らは皆、良識のない人間である。

「董卓の莊園には羌族との交易を中止し、物資が外に流れないようにするべきです。ただでさえ涼州は漢王朝の支援がなければ成り立たぬ土地、余所者に渡す物資の余裕なんてありません！　馬騰にも董卓の莊園に手を貸さぬように制限をかけてやりましょう！」

そうして誰もツッコミ役がいないまま、この発言はそのまま承認されることになった。

翌月、涼州の収益は半減した。ついでに漢王朝の収益も激減した。

良識なき文官達は今後の身の振り方について真剣に頭を悩ませることになった。

第三話.

西の最果てまで続く交易路、異国の者はオアシスの道と呼んでいる。

最果てより来たる商隊との交易は漢王朝に莫大な富をもたらしており、漢王朝の財政に大きな影響を与えていた。その通り道である涼州もまた異国との交易の恩恵を授かっており、これによつて赤字が続く涼州の財政を補填されてきた。さて、この交易路なのだが異国の人だけが活用している訳ではなく、当然の話ではあるが漢民族の商隊も活用してきた。そして、その一つに董卓が一門にいる董家の姿もあり、董卓が羌族と友誼を結ぶ下地にもなった。

異国の商隊にとつて羌族は美味しい商談相手ではない、そして羌族にとつても異国の商隊は美味しい交易相手ではなかつた。

というのも羌族と取引するよりも漢王朝と取引する方が儲けが遙かに大きかつた為だ。商隊が羌族を頼るのは基本的に食料や水の確保が目的であり、あまり商品を譲ってくれない事が羌族にとっての悩みの種であった。そんな時に現れたのが董卓であり、彼女は惜しみない交易を申し出た。それは作物であつたり、加工食であつたり、中には趣向を凝らした工芸品も含められる。この結果、街道周辺の羌族は徐々に董卓個人との交易に比重を傾けるようになり、羌族自らが率先して交易路の整備を行うようになつたのだ。また董卓の機嫌を損ねない為に漢王朝を目的とする異国の商隊には手を出さず、逆に自国の賊徒や他集落が街道を荒らさないように抑え込む程だ。この結果、南の羌族に対する備えは必要最低限に抑える事ができ、オアシスの道の管理と維持は容易となつていた。

そして涼州が羌族との交易を打ち切つた結果、羌族は交易路の維持を放棄した。同時に大陸全土では黃巾党と呼ばれる組織が放棄し、漢王朝が内乱状態にあるという情報を手にした反漢思想を持つ羌族が南の氏族と結託し、略奪を再開してしまつたのだ。匈奴族と鮮卑族とは常に交戦状態にあつた為、涼州は四勢力から略奪を受ける事態となり、馬騰を始めとした涼州軍は涼州全土を駆け回る羽目になつた。こ

れにより、涼州の収益は半減する。こんな状況では異国の商隊も漢王朝に向かうことを諦める者が増え始めて、結果、漢王朝の財政にも大打撃を与える不始末となつた。

これは不味いと察した涼州刺史の耿鄙は、街道沿いの羌族と連絡を取ろうとしたが「董卓を出せ、もしくは賈駆だ」の一点張りで聞く耳を持たなかつた。その時、「馬騰ではいけないんですか?」と使者が涙ながらに提案するも「馬騰は人物的には信用できるが、能力的に信頼できる人物ではない」と突つ撥ねられた一幕もあつたとかなかつたとか。この状況に嫌気の差した耿鄙は不貞寝したらしい。

そんな情報が入つてきたのが先週の話だ。

「さて、成公英と閻行。先ずは二人の意見から聞いてみようか?」

軍議室、と呼ぶには余りに粗末な宿舎の一室にて。

使い古した地図が広げられた机を挟んで、行儀良く座る二人の少女を見やつた。片や眼鏡を掛けた長躯の女性であり、名を成公英と云う。切れ長な目が特徴的な彼女は韓遂義勇軍の知恵袋であり、作戦行動を取る時は成公英に意見を問うのが軍の通例となつてゐる。その隣に座る黒髪長髪の若武者の名は閻行。身の丈を超える大太刀使いであり、髪を後ろ手に縛つているのが特徴的だつた。成公英は考え込むように地図を睨み付け、閻行は腕を組んで目を伏せる。

そして先に口を開いたのは成公英の方だつた。

「動くのであれば、明日にでも動く必要があります」

「その心は?」

「我らは寡兵である為です」

成公英は地図を指で指しながら「居延張掖居延属国の郡治所がある県。、候官張掖属国の郡治所がある県。、？得張掖郡の郡治所がある県。」と北から南へとなぞつてみせる。

「涼州を獲るには、先ず、この三つを取らなくてはなりません。高望みをするのであれば武威郡河西四郡における生産拠点、まで、出来れば武威郡の西半分を占拠してしまいたいところです」

「丁度、前線と本隊を分断する形になるな」

「はい、先ずは河西四郡を手中に收めること。少なくとも隴西郡にい

る騎馬三千の馬騰隊が来る前に張掖郡を抑えられなければ、私達は為す術もなく敗退します」

居延県を落とし、張掖居延属国を獲つてからは時間の勝負だと成公英は告げる。

「我らの蜂起が馬騰の耳に入り、隴西郡から張掖郡まで騎馬を率いてやつてくるまでが期限です。幸いにも馬騰隊は騎馬が中心の構成である為、適當な砦か城都で防御を固めておけば時間は稼げます」

「その間に西の敦煌郡と酒泉郡を落とす訳か」

「だが、西端の敦煌郡には馬超がいる」

それまで黙っていた閻行が口を開き、何処から持つてきたのか将棋の駒を幾つか取り出して地図上に置いてみせる。

敦煌郡には金将を置いて、隴西郡には銀将と三枚の桂馬を添える。金将は西涼の錦である馬超、銀将が馬騰。桂馬は馬家一門のことを示しているようだ。涼州の北東に匈奴族、北には広大な土地を持つ鮮卑族、北西に羌族、西には氐族。それぞれに角将と飛車で対応する。この中で最も敵対的なのは氏族。涼州の三傑を怖れており、その影響は董卓と賈駆なき今もまだ残っている。それ故に攻め込んで来なかつたのだが、つい先日、涼州と羌族の繋がりが断たれることを知り、近頃は活発的になってきたと云う。最も友好的な羌族も交易が途絶えた事で交易路を守ろうとせず、反漢的な羌族が涼州を荒らすことを止める者はいなくなつた。ただ匈奴族は并州、鮮卑族は幽州と定める為、目下、涼州と積極的に敵対しているのは氏族と羌族の半数だ。

そして今、交易路の守護を担つているのが馬超という娘だ。
「馬超は西涼の錦と呼ばれるほどの人物だ。負けるとは言わないが決して油断が出来ぬ相手ではある」

閻行は腕を組んで成公英を見やる。その成公英は悩ましげに眉を顰めていた。

「馬超は確かに勇猛です。涼州では一、二を争う程の武勇を持つており、馬騰仕込みの用兵術も身に付けています。騎馬隊を率いれば、大陸中を探しても右に出る者は居ないと断言できるほどです」
しかし、と成公英は続ける。

「彼女の用兵術は馬騰と同じ欠点を抱えています。即ち、自らが先頭に立つことで将兵を率いる事、そして馬超の巧過ぎる用兵と連携を取れる者が馬騰以外にいない事です。彼女個人の武勇は素晴らしいが、帥としての経験が乏しい。私達が突けるとすれば、その一点に限るかと思われます」

「本隊への備えに将を一人、残すことを考えると決して勝算が高い訳ではない。随分と博打が強いことだ」

「一から身を立てようと言うのです、多少の博打は許容して然るべきですよ」

二人の思考が張掖郡を獲つた後に移行しつつあるのを見て、先走り過ぎだ。と二人を諫める。

「先ずは張掖郡、その足掛かりの居延県よ。あまり先を見据えても足元を救われるわ」

「……居延県に関しては前に話した作戦があります」

「あの大博打か。ウチの軍師様は随分と博打がお好きなようで、もう少し確実性の高い作戦が欲しいところだな」

閻行の軽口に成公英は不貞腐れた様子で、様々な可能性を考慮した結果です。と口先を尖らせて告げる。

「先立つ物をない最初こそが最も難しいのですよ。いずれにせよ、速度が勝負である事には変わりない。張掖郡で最低限です、何処まで戦果を上げられるかで今度の作戦の難易度が変わります」

そこで彼女は話を区切り、中指で眼鏡の位置を直した。

「羌、氐、鮮卑、匈奴……そして黄巾党、これらには既に漢王朝と涼州の現状については情報を流しています。実際に動いてくれるのは氐族、そして羌族の反漢勢力。匈奴族は半々と言つたところでしょうか。鮮卑族は交易路を使つて商隊と仲を持つてゐる為、動きが慎重になるはずです。黄巾党が涼州各地に出没するようになれば、それだけ私達は動きやすくなる」

「……その策、敵を我らが土地に招いているようで好かないんだけどな」

「先立つ物をない故に、理想だけでは大義を為すことはできませんよ」

我らが誇りを取り戻す為に勝たなくてはならないのです。と成公英が閻行を睨みつける。

「……まあ頭の良い人間の考へている事は理解できんよ。私はただ韓遂殿の人柄と成公英殿の頭脳を信じて戦うことにする」

そう言つて肩を竦める閻行に「貴女の善性は我らにとつて貴重ですよ」と成公英が小声で呟いた。

決して仲の良い二人ではない。しかし二人の相性は思いの外、悪くはなかつた。

麒麟児と謳われる姜維を仲間にすることは出来なかつたが、この二人を得られた事を私は誇りとする。

「この戦いが終わつたら私達で真名を交換しよう」

ふと何気なく口にしたのは、何時かの誓いだつた。

ただなんとなしに真名を交換する機を見失つて、どうせなら何か事を成し遂げた後で交換しようつてなつた約束だ。

この提案に二人とも力強く頷き返してくれた。

†

此處はなれ果てだ。

張掖居延属国居延県、城都。大陸全土でも辺境と呼ばれる土地の更に僻地だ。

この土地を開発する為ではなく、鮮卑族の備えとして置かれた城都とは名ばかりの砦に千程度の将兵が詰め込まれる。辺境の僻地である為に食料の自給率は決して高くはないが、食糧難の御時世、少しでも自分で賄う為に屯田し、周りには必要最低限の集落が築かれていた。此處は漢王朝の領土ではあるが、漢王朝の庇護から外れた土地。それ故に此處に流れてくる者は、訳ありの者が多かつた。故郷では村八分になり、かといつて異民族に逃げ込むこともできない者達が集まる土地になる。そして、そんな土地を守護する官僚もまた出世の道から外れた者達で構成されている。留置所、と揶揄されることもあつた。

こんな場所だから誰も眞面目に働くとはせず、時折、鮮卑族や匈奴族が略奪にくることもあるが見て見ぬふりをすることも少なくない

い。というのも張掖郡から張掖居延属国を繋げる街道以外はまともに道の整備をされておらず、襲撃を受けてからこの砦まで情報が届くのに一週間以上もかかるのは普通だ。そこから号令をかけるのに丸一日、出陣する為の準備で更に三日程度、士気がどん底の行軍では現地に辿り着くまで更なる時間を要し、現場に辿り着くまでに半月近くもかかる。そんな有様では救援に向かう頃には集落なんて跡形もなくなつており、若者は男女問わずに連れ去られ、野晒しにされた老人達の死骸を拝むだけだ。それに出陣には莫大な費用がかかる。拠点で屯田しているだけでも食料は底を尽きかけているというのに、無意味な出陣を繰り返していくは兵糧攻めを受けてないにも関わらず、砦を枕に飢えて死ぬことになりかねない。

私は、此処を地獄だと考える。まともな感性では生きられない。此処は人が人としてある為に必要な良心を容赦なく削ぎ落とす。民草が異民族に奴隸として連行されることを良しとし、女子供が陵辱を受けることを見て見ぬふりをしなくてはならない。きっと私はもう手遅れだ。執務室にて、「また一つ、集落が襲撃を受けた」と薄汚れた衣服に袖を通す文官の氣怠げな声で報告を受ける。こういった報告に私はもう心が動かなくなつてしまつた。此処に来た時は、せめて此処ではない何処かへの異動を夢見ていたが、今となつてはもうそれすらも諦めている。

そんな時、また一人、執務室へと上がり込んできた。

「どうした？」

「韓遂つて奴が門まで来ています。なんでも鮮卑族が攻め込んできただ、と」

「攻め込んだつて、また略奪目的じゃないのか？」

「どうにも違うみたいですねー。なんでも数千規模の軍勢が攻め込んで来たとか、なんとか？」

「……おい、ちょっと待て、いや、事実確認が先か」

韓遂の名は知つている。

河西四郡で名を馳せる狭者で、民衆を賊徒や異民族の魔の手から守り続ける英傑気取りだ。

その者とは何度か顔を合わせた事があり、信に足る人物だと認識している。

「通せ」

韓遂の言う事であれば、無視する事もできないな。と謁見を許す。結局のところ、私は鮮卑族が本格的に攻め込んでくることを信じていなかつた。涼州は西の最果てへと続く道以外は不毛な土地であり、そして、同種の街道を鮮卑族も有している。その為、鮮卑族が涼州を攻め込む理由は略奪以外に思い付かなかつた。実際、此処に砦が建てられているのも涼州を攻め込む橋頭堡にされない為、という意味もあるが、実際には略奪の拠点にされない為つていう意味合いの方が強い。

だから私は張掖郡に伝令を送らず、韓遂を相手にたつた二人の護衛だけで顔を合わせてしまつた。

「久し振りです、太守殿」

礼儀正しい所作で頭を下げる韓遂を見て、私は執務机に頬を突きながら応じる。

「名ばかりで実際の権限は県令並だけどな。指揮権は張掖郡太守様にある」

数ヶ月ぶりに合わせた顔に、若干の違和感を感じる。

背中を覆い隠す金髪に透き通るような青い瞳。衣服は脱ぎ捨てられており、上は薄着の下着のみを羽織つていた。

そして腰には剣を佩いでいる、血の臭いがする。

「……それで此処、居延が攻め込まれてていると言るのは本当なのか？」確認するような問い掛け、視線は韓遂に向けたまま、執務机に隠していた短剣に手を添える。

「それは本當です。數は千から千五百程度、意外と集まりましたよ……恨まれてますね、貴女方は」

「仕方ないだろ。動かせる将兵もなければ、動かすための物資もねえんだよ。ないない尽くしで嫌になる」

まあ、と息を吐いて、間を取る。

「この苦労、お前も直にわかるさ」

言うと同時に執務机を蹴り上げて、韓遂にぶつける。

同時に短刀を片手に椅子から飛び出した。執務机が真つ二つに両断される。その先で二人の護衛が首筋を斬られているのが見えた。宙を舞う書類の束を搔き分けて、何処でもいい。と韓遂に目掛けて、短刀の切つ先を突き立てる。次の瞬間、手首から先の感覺が失われた。舌打ちひとつ、切り落とされた手首には意にも介さず、大きく踏み込んで蹴りを放つた——が、それもまた斬り飛ばされる。右手首と左脚、その両方が失われた。崩れ落ちる体、舞い上がる紙吹雪の中からスルリと突き出された直剣の切つ先が私の胸元を貫いた。

嗚呼、やつと終わる。漸く解放される。霞む視界、墮ちる意識、死に対する不安や恐怖はなく、最後に残つたのは安堵だつた。

†

とある集落で蜂起した後、居延県にある城都まで行軍を続けながら招集した義勇軍は千を超える。

城都とは名ばかりの砦も、数年間かけて築き上げた信頼を使つて侵入し、内側から陥落させた。それは暗殺と誹られる手口、しかし、張掖居延属国の民草は私達を非難するようなことはしなかつた。それ程までに官僚は民草に嫌われていた。それもそうだ、税を払えという癖に民草を守ってくれないのだから当然だ。そうして居延県は大した衝突もないまま陥落する。そして私の名前を知つて協力したいと申し出る者が半数近く、涼州出身の者達を義勇軍に受け入れて我が義勇軍は三千の大所帯になつた。これだけの数になれば、城を落とす目処も出てくる。

そのまま南下を続けて、張掖属国、そして最初の目的であつた張掖郡の奪取までトントン拍子で事が進んだ。

「韓遂様、此処からです。此処からが大変になります」

城壁の上、総数一万を超える軍勢を見下ろす横で成公英が告げる。

我が軍は最早、義勇軍とは呼べない規模にまで膨れ上がつた。尤も、その七割方がまともな調練を積んでいない民兵である為、涼州軍と真正面からぶつかれば鎧袖一触で吹き飛ぶ程度の軍勢だ。それで

も城があれば戦える、それでも砦があれば戦える。相手が反撃の準備を整えるまでに多くの領土を切り取り、反撃を受ける前に防御を固めなくてはならない。

顔を上げる、空は雲ひとつない晴天だ。風が吹き抜ける。視線を落とす、そして洛陽のある方角を見た。

「そうだな、此処から全てを始めよう。この涼州の地から全てを変えて行こう」

これは誰かが果たさなくてはならないことだ。

少しでも不幸な人を減らす為、誰も彼もが幸せになれる世の中とまでは云わない。今よりも少しでも良い世の中にする為、今よりも少しでも努力が報われる世の中にする為、漢王朝と対峙することを選んだ。私は前に進み続ける。理想成就の為に、独善的な正義を胸に掲げる。昨日よりも素晴らしい今日を、今日よりも素晴らしい明日を、一歩ずつ地を踏み締めながら先を見据える。この先に道はない、もし道があるのだとすれば、私が進んだ後が道として残る。どれだけ険しい道であっても足を止めず、ただ歩み続ける。

それだけが未来を掴むたつたひとつの手段だと盲信して、己が掲げた理想に殉じる。

私達の戦いはこれからだ。

第四話.

これは月と詠ゆえが涼州を出て行つた後の話になる。

その日は、それまで涼州刺史を務めていた成就が洛陽に戻り、代わりの者が送り込まれてくる日だった。

漢王朝に仕える役人達は揃つて、新しい涼州刺史の面を拝んでやろうと城門付近まで足を運んだ。程なくして城門は開かれた。さて、どれだけの人間を連れ込んで来るのか。こういう時、地元と外様で派閥が出来るのが世の常であったが、しかし、城内に入ってきた人間は驚くほどに少なく、護衛に十名程度。使用人らしき者達が四、五人と明らかに少ない。そして、この中で唯一、馬に乗った少女は周りを見渡すと小さく溜息を零した。さもありなんと肩を落とす。この何処か無気力そうな少女が、新しい涼州刺史様であるようだ。

二つ結いの縁髪、少女は眠たそうに細めた両目で私を捉える。

「貴女が馬騰ね？」

不意に問われて「はあ、そうですが」と氣のない返事をする。

ふうん、と品定めするように私の事を見つめた後で「話があるから執務室まで来て頂戴」と呼び出しを受ける。

この当時はまだ彼女、栗花落つゆりの事を私は何も知らなかつた。

†

はつきり言つて最悪だつた。

涼州刺史に任命された時、先ず思い浮かんだのは左遷の二文字であつた。

涼州は漢民族というよりも羌族に近い文化を持つ者が多く、鮮卑族や匈奴族といった遊牧民族の影響を色濃く受け継いでいる。その為、涼州の民草は漢王朝に対し恭順しているとは言い難い。もつと云えば、状況が独立を許していないだけだ。散々、異民族を相手に戦わされてきた涼州軍は周りから怨みを買つていて、今の状況で独立を宣言してしまっては四方八方が敵しかいない状況に陥りかねない。そもそも董卓の活躍により、羌族との関係を上手く築き上げられていたことで緩和されているようだけど、それはそれで困るの

が漢王朝。涼州は西の最果てまで続く交易路を維持する為に大事な領地、此処を独立されてしまうと漢王朝にとつて、涼州の価値の七割方がまう事になる。というよりも漢王朝にとつて、涼州の収入源が大きく減少してし異国との貿易だ。なので涼州刺史というのは、涼州に対するお目付役という意味合いが強かつた。仮に左遷であつても、涼州を開拓せよ。という意味であれば、少しあはやりがいも出てくるものであるが、「開拓するな、されども異民族に突破されない程度には力を持たせておけ」という任務はなんともやる気の出ないものであつた。涼州の人間からは憎まれて、それでいて功績を立てる事も叶わない。四、五年経てば、洛陽に戻されるのであろうが、いやはや、しかし、涼州で落ちた名声を取り戻すことは困難を極める。

酷い貧乏くじだ。本当にやつてらんない。

涼州漢陽郡隴^{ろう}県、州治所がある城都の城門を潜る。

その時、出迎えた。もとい私を品定めに来た涼州人の顔を見て、これはもう手遅れだと諦めた。最初から歓迎されるとは思っていない、しかし実際に目にすると心に来るものがあつた。私は完全に外様の厄介者だ。まだ言葉一つも発していないにも関わらず、色眼鏡越しに見た姿で私のことを嘲笑する。これは駄目だ、と私は小さく溜息を零す。まあ、どうせ涼州刺史に選ばれた時点で詰んでいた。賽の目が一とにしか出ない賽子を持たされているようなものだ。

誰も私のことを見定めようともしない中、唯一、私個人を見つめる者を見つけて、執務室に呼び付ける。

なるほど、彼女が馬騰。涼州の三傑と呼ばれるだけはある。それはただ単に、誰であつても相手のことを見縊らないという経験則に基づいての事だろうが、たつたそれだけの事が私にとつての清涼剤に成り得た。私のことを真っ直ぐに見つめてくる彼女の瞳は小気味好い。生粋の武人である彼女には肥えた舌はなかつたが、私は執務室まで来た彼女に洛陽から持ち込んだ最高級の酒や茶葉を惜しみなく振る舞うこととした。それは些細な味の違いも分からぬ者には勿体ない代物であつたが、それよりも、おもてなし以上の意味を持たぬ代物の裏を読もうとする連中に渡す方が勿体ないと感じられた為だ。その

価値は分からずとも、美味しいものは美味しい。と言える彼女が幸せそうに茶請けを頬張る姿を見つめながら溜息を零す。

今となつてはもう私が考えるべきは隠居した後の事だつた。

†

「私は何もしないから貴女達で勝手にやつて頂戴」

執務室に呼び出されて、先ず最初に言われたのがこれだつた。

耿鄙、栗花落まだこの時は真名を預かつていない。は最初から覇気のない人物だつた。何処か投げやりで、何処か諦めている。面倒臭そくに頬杖を突きながら茶請けを頬張る姿は新任の州刺史とは思えなかつた。私の人生は詰んでるので、と彼女は氣怠げに語る。私を呼び出したのは、あの中で最もマシに見えたから。意思表示をしたのは、涼州闕に疎まれてまで戦う意思がないから。嫌われてまで涼州を良くしたいとは思わない、と彼女はぶつきらぼうに答えてのける。だから、と。涼州のことは涼州の人間でどうにかしなさい、と。彼女は私に丸投げした。

涼州刺史、耿鄙は無能である。何もせず、惰眠を貪り、ただ判子を押す仕事に従事する。

その噂を流したのは栗花落自身だ。実際、彼女の涼州刺史としては無能極まる。何もせず、邪魔もせず、そうする必要があつた。と私が理解できたのは半年もの月日が経つた頃合いだつた。

これを彼女に突き付けると、栗花落はやはり呆れたように溜息を零す。

「今更？」

という辛辣な言葉に恥を知る。

ともあれ涼州の事は涼州の者でどうにかしなくてはならない。
それも栗花落が州刺史を務めている間に。

†

涼州刺史としては無能であつた事は自覚している。

少なくとも私は自らの意思で動くことはせず、どうせ必要にならなければ良い、といふ短絡的な思考からだ。それでも涼州の三

傑の名は知っていた。だから評定の時、文官の一人が羌族との交易を取りやめる提案をしてきた時に問い合わせたのだ。「馬騰が言っていたわ、なんでも外交と交易の為だとか?」と確認を取つた。すると彼は「ええ、そうでしょう」と領き返し、「しかし、馬騰は根っからの武人であることを忘れてはなりません」と彼女を馬鹿にしたように答えたのだ。まあ確かに馬騰、つまり翡翠に政治に優れている訳ではない。しかし彼女には知恵を受けた者がおり、その者が先見性に富んだ知恵者であった。とはいえた、彼女が翡翠に齎した情報も数年前の話になる。西の最果てにおける国家情勢が複雑怪奇であるのと同じように此処での情報も数年前ともなれば化石情報。不安はあるが涼州は彼らの土地である。彼らのやりたいようにやらせた方が良いと思って、そのまま承諾した。どうせ言うこと聞かないし、変に反感を買うのも面倒だし、暴走されるよりかはマシだと思つての判断だ。

そして失敗した。その損害は漢王朝の財政を揺るがす程に大きなもので——というよりも街道整備とか警備とか羌族で担つていたとか聞いてないんですけど? それで街道の整備と警備に費やされる予算は如何程に? あ、ふーん、それって羌族に渡していく分の物資、簡単に使い潰しちゃう量ですよね? はあーつ、つつかえ。政治の分野で翡翠に負けるとか辞めたら? 御役人、向いてないよ。君が佞臣とか言つてる輩の方がよっぽど使えそうんですけど、佞臣さん?

さておき、これが涼州だけの被害に収まるのであれば、佞臣さん達を罷免して、残つた者達に涼州運営を任せてしまふのも悪くない。しかし漢王朝にまで被害が及んだとなれば話は変わつてくる。仕方ない。と重たい腰を上げて、羌族との会談する方針で固める。羌族の中は、やれ董卓だの、やれ賈駆だの、と聞く耳持たずのようだが、流石に涼州の最高責任者である私が赴けば、一目くらいは会談に応じてくれるはずだ。護衛には……翡翠は無理か、今の不安定な情勢で翡翠を本隊から離すことはできない。なら彼女の嫡子である馬超に親の代わりを勤めて貰うとしようか。彼らも翡翠の娘ともなれば、興味を持つてくれるはずだ。兎に角、今は交渉の席に着くことが大事である。

幸いにも涼州は私がいなくても仕事が回る環境で、大した手間なく

河西四郡、西涼の地まで赴くことができた。

そして羌族との会談を調整している最中、早馬で急報が知らされる。

「……本当に悪い時には悪い事が積み重なりますね。どうにも私の天命は涼州刺史となつた時に尽きていたようです」

竹簡には走り書きで、張掖郡が賊徒に落とされた旨が書かれてあつた。つまり本隊と分断された、帰り道を抑えられた。

「翡翠は……確かに、氏族の侵略に対応しているのだつたかしら？　いや、でも翡翠の事だから自分は行かずとも娘の誰かを寄越しそうね。なら、そうね。張掖郡を挟み撃ちにして奪取、無理そなうなら河西四郡を放棄。救援部隊と合流を優先して、戦線の再構築といったところかしら？」

指先をくるくるっと回しながら、これからの方針を述べると、隣に控える翡翠の娘である馬超がポカンとした顔を浮かべていた。

「どうしたのよ、気になる事があつたら言つといた方が良いわよ」

「いえ、その方針で構わないと思います。ただ……なんというか……その………」

言い淀む小娘の姿に、まあ、そうね。と小さく息を吐いた。

「風聞は参考程度に留めておくことを勧めるわよ。裏で誰が情報を弄っているのか分かつたものじやないわ」

「心得ておきます」

素直に頷く翡翠の娘に、面白味に欠けるな。と不謹慎なことを思つたりする。

「ところで、どうして貴女は実力を偽るのでしようか？」

不器用な敬語に、さて、どうしたものか。と悩み、もうどうでもいいか、と素直に答えることにした。

「漢王朝からは涼州の力を適度に削ぐように言われているからよ。それで涼州が力を付けちゃうと裏切り者になりますし？　かといって涼州に生きる者達を不幸にして喜ぶ趣味もないし？　お目付け役の私が無能であることが双方にとつて都合が良かつたのよ」

涼州に来た時点では出世は諦めている。

半ば董卓の功績とはいえ、涼州の発展に大きく貢献した前涼州刺史の成就の噂が忽然と消えた時点でお察しだ。流石に殺されてしまいと思うけど。かといって漢王朝の指示に従つたとして、涼州で悪評の付いた者を要職に付けるはずもない。つまり涼州刺史に任命された時点で私の官僚としての人生は詰んでいる。

そもそも私が涼州刺史に任命されたことが誰かの陰謀なのだろうけど、それは今言つても仕方のないことだ。

第五話.

夜空を見上げれば星がある、星を詠めば未来を識る。

この大陸には無数の人間が暮らしていて、その数だけ夜空には星が浮かんでいた。私には星を詠むことができる、誰がどの星の下に生まれてきたのか正確に読み取ることができた。しかし、それは数多の可能性の一つに過ぎない。訪れるべき未来というものは、確定された未来ともまた違っている。宇宙は無限の可能性に満ちている、此処ではない何処か。あり得たかも知れない未来が幾重にも折り重なつていた。星詠みの力とは、つまり、そういうことだ。この大陸に登場する全ての人物には役割があり、決められた役割を持つている。しかし必ずしも星の定めた運命に従う訳ではない。星とは道標に過ぎない。この世界の登場人物は皆は皆、今を生きるために必死で、掴み取るべき何かの為に、守り抜くべき何かの為に戦っている。未来とは一つではない、可能性とは常に折り重なつていて。世界とは一つだけとは限らない。

星を眺めて、可能性を見る私はきっと観測者とでも呼ぶべき存在だった。

此處は涼州隴西郡。従姉、月の莊園。董草

奴婢の集落では毎日、個人にとつては三日一度か二度の間隔で兵としての訓練を積んでいる。指導するは涼州においては侠者として名が知られる二人、李団と郭汜。星見をしてみると彼女達と私は少なからず縁があつた。私にとつての凶星でもあるようだけど、まあ、そこまで強い訳でもない。未来は変えられる、というよりも未来は運命によつて定められている訳ではない。未来とは人間の意思によつて決定付けられる。そう思えばこそ、二人を受け入れることに抵抗はなかつた。

そもそもの話、吉兆とか、凶兆とか、暇潰しに詠んでるだけで占い以上の意味はないと思つていて。それもそのはずで御姉様を照らす星は禍々しくも眩い光を放つており、誰もに忌み嫌われる魔王としての運命が示されている為だ。あの虫も殺せないような御姉様が？

魔王だつて？ ありえない。天地がひっくり返つても御姉様が畏怖の対象になるなんて想像できない。もし仮に、そんな未来があるとすれば、それは自分の為ではなく、誰かの為に自ら泥を被るといった可能性がある程度だ。

空を見上げて星を詠む、それだけだ。この世界をどうにかしたいとは思わない。でも、一生懸命に頑張る誰かを見続けたい、見守りたい。そんな欲はあつたりする。

「張掖郡が韓遂率いる賊徒に落とされました。それに合わせて西からは氏族が、南からは黄巾党が涼州に攻め込んでいます」

屋敷のすぐ近くに置いた机で書籍を読み耽つていると奴婢の一人から報告を受ける。

以前、韓遂が忠告をしてきたのは、つまりこういうことだつたようだ。御姉様の莊園は他民族に落とされるのは勿論、賊徒に荒らされることは許されない。何故なら韓遂が目指しているのは強い涼州、つまり涼州の要となつた御姉様の莊園を失うことはできなかつた。

連絡役の奴婢には、そのまま李団と郭汜への言伝を言い渡す。

「念の為に防衛を固めるように言つてといて」

戦力として涼州軍の味方をするつもりもなければ、韓遂に肩入れをするつもりもない。

御姉様の莊園を守る為に尽くす。

それは役割とか運命に依存しない私の意思で決めたことだ。